メジロマックイーンだと思ってスカウトしたら、おばアサマの方でした。

風神・雷神

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メジロマックイーンが推しの転生トレーナーがメジロマックイーンをスカウトしようとしたら、まさかの素顔が瓜二つのメジロアサマをスカウトしてしまい、大変なことになってしまう物語。

目　次

全ての始まり ―― 1
やっぱりうちの愛バが最強だった ―― 5
神の試練 ―― 9
頼れる相棒 ―― 13
二人で一緒なら ―― 18
最高のティータイム ―― 25
敗北寄りの勝利 ―― 31
彼女は苦悩し、彼は感謝している ―― 37
二人の挑戦者　前編 ―― 43
二人の挑戦者　中編 ―― 50
二人の挑戦者　後編 ―― 56
ライスシャワーは臆病である ―― 64
トレセン学園の黄金船 ―― 70
アサマはやはり身内に甘い ―― 77
いつ孫が一人だと言いましたか……ですって？ ―― 85

全ての始まり

「君の走りに感動した。」
今、一人のウマ娘をスカウトしようとしている。
彼女の名前は、メジロマックイーン。
名門メジロ家のお嬢様であり、落ち着いた淑女的な物腰と気品、自身の血筋に強い誇りを持っており、その姿はとても気高く、学園の生徒などから羨望の的となるほどだ。
そんなトレーナーとして新人の自分にとっては、高嶺の花である彼女に猛アタックしている。
学園での授業が終わり、帰宅しようとしていた所を後ろから声をかけているので、後ろ姿しか見えないが、それでも本人と断定できる。
今がチャンスだと思い、話を続けた。
「流石メジロ家のウマ娘だと思ったが、俺にはそれ以上だった。君のあの走り、まさしく日本一の称号を取るに相応しい」
自分の意思とは勝手に言葉が出てくるような感覚だった。
「君と一緒なら、世界だって取れるかもしれない。だから頼む！俺に君を担当させてくれ！」
「この心の中の気持ちを表現するなら、感動を通り越して、これはもはや『愛』と言ってもいい！」
熱心になる理由の一つに、俺の一番の推しのウマ娘が、メジロマックイーンだからかもしれない。
声をかけられて、彼女がゆっくりとこちらを向く。
容姿は、ゲームやアニメで見たメジロマックイーンその人だった。
綺麗な長い髪に、片耳にはリボンを付け、ワンポイントであろうか毛先がロール状に巻かれ、出る所は出て引っ込むところは引っ込んでいる、スタイルの良さもゲームと同じで再現されていた。
……ん？
何か妙だぞ……。
目の前にいるマックイーンを見て、疑問が浮かぶ。
後ろから声をかけたのと、スカウトに必死過ぎて周りを見ていなく

て気づかなかったが、マックイーンってこんなにスタイルが良かっただろうか。
こう……何とは言わないが違い過ぎると言うか、明らかにBが70以上はあると一目で分かるほどの豊満なモノを持っていた。
その他にも、身長も設定と比べて少し高い気がする。
だが……まぁ、記憶違いによる気のせいだろう。
こんなメジロマックイーンに瓜二つのウマ娘がいるなんて聞いた事も無い。
彼女は、ジッとこちらを見ると、呆れたようなため息をして話始めた。
「……何です？あなたは。選抜レースで勝っていた他の子たちになら分かりますが、後ろから数えたほうが早い順位だった私に声をかけるなんて。何か企んでいるのではなくって？」
耳を後ろへ向け、怪しい人物を見るような目で、こちらを観察してくる。
このままでは、まずいと思い何か言わなければと思っていると、彼女の方が口を開いた。
「ですが。……まぁ。今日……いえ。この学園に入って、あなたが初めて私をスカウトしてくださいましたし、メジロ家のウマ娘としてその気持ちを無下にする事なんて出来ませんので……。」
最初はどうなるかと思っていたが、以外にも期待できる反応で良かったと安心している。
「それは、嬉しい。良かった。」
滅茶苦茶運がいいらしく、まだ誰にも声をかけていないらしい。
これは、もしかしていけるのでは！と思ってしまう。
目の前のメジロマックイーンであろう彼女は、頬を染めながら話を続けた。
「なので、一度家に帰り今回の話を検討しますので、お返事は明日でも構いませんよね？」
「ああ。それで構わない。だから今回の話、前向きに検討してくれ。よろしく頼む。」

「そうですか。では……。あ、それともう一つ。」
話を終えて帰ろうと正門へ歩き出した彼女が立ち止まり、もう一度こちらに視線を送ってきた。
「これは、スカウトとは関係ありませんが……。気安く『愛』などの言葉を使わない方が良いと思います。私とあなたは、学園の生徒と、学園の生徒であるウマ娘をサポートするトレーナーですから、それ以上の関係になることは余りよろしくないと思います。なので、それを聞いて勘違いをしてしまう生徒も出てきてしまう可能性があります。まぁ、私は、そのような勘違いなどしませんし、爛れた関係などにはなりませんが……。なので、その点は直した方がよろしいかと。」
「え。あ、はい。すいません。」
余りの圧で、敬語になってしまった。
話し終わったと思ったが、「では、最後に……。」と彼女は話を続けた。
まだ彼女から、何かあるのだろうか？
「自己紹介が、まだでしたわ。知っているとは思いますが、念のために私は……」
彼女が俺に対しての礼儀なのか、改めて自分の名前を言おうとする彼女に、すかさず答えた。
「いや、知ってるよ。君はメジロマック……。」

「メジロアサマと申します。以後お見知りおきを。では、また。」
ペコリと気品に溢れるお辞儀をして、メジロアサマは帰路についた。

そ　　え
??て、俺はある答えにたどり着いた……。

おかしいと思ったんだ。
色々と不可思議な点があったのに、なぜ今になって気付いたんだ。
俺はなんてバカなんだ……。
俺は、膝から崩れ落ち頭を抱えた。
彼女……及びメジロアサマさんが、その場から離れた後、冷静に考えてみると分かったことがあった。

メジロマックイーンだと思ってスカウトしてたけど、全くの別人じゃね……。

やっぱりうちの愛バが最強だった

スカウトから数年後
とある老舗旅館

「では……。これより、我らの悲願であった天皇賞での大勝利を祝しまして、乾杯!!」
「……いただきます。」
豪華な海鮮料理と一緒に運ばれてきたビール瓶から、コップへ注ぎ、勢いよく飲み干す。
アルコールが疲れた体に染み渡る。
今俺は、客室で一泊二日の旅行を担当のメジロアサマと二人で楽しんでいた。
この旅行自体、アサマの話によると、アサマの両親が記念にと用意してくれたらしい。
「……いや、でも今になって申し訳なくなってきたわ。今日急に誘われたけど、こんな豪華な旅館をメジロ家の方で用意してもらってさ、一銭もお金払ってないけどいいのかな?」
「はい。特に気にしなくてもいいと思います。私も、今朝に突然お母様から言われて今に至りますから。全く、どうしてこうも強引なやり方を……。私にも、タイミングというものが……。」
「そっちも今日聞いた感じなのか……。大丈夫か?やっぱり、嫌なら今からでも帰っても……。」
「……いえ。問題ありません。それよりも、早く料理を頂いてしまいましょう。冷めてしまっては、料理人の方に悪いですから。」
そう言うと彼女は、自身の前に置かれた料理を食べ始めた。
やはり育ちの良さだろうか食事の時でも、姿勢やマナーなどと言ったものが、気品溢れるお嬢様感を感じさせる。
だが、俺に出された料理の倍以上が置かれているのは、今になっては見慣れたものだ。
それにしても、旅行行く時にアサマのお母さんが「しっかり、決め

てらっしゃーい！」とニッコニコで邸から送り出してもらったけど何だったんだろうなあれ。
まぁ、うちの担当も楽しそうだからいいか。

「あの、一つ聞いてもよろしいです？」
酒も進み互いに料理を一通り食べ終わったタイミングで、アサマが聞いてきた。
「ん？何？」
「……あなたは、これからどうするのですか？その……他の子を担当に加えたり……し、しますの？」
急な質問に少し驚いたが、答えに困るような内容でなく安心した。
「で、ですから。もし、他のウマ娘の方を担当するなら、私もそれに合わせなければいけませんので、少しでも早く聞きたいと思ったのですが……ど、どうですか？」
「あぁ、そういう事なら大丈夫。新しく担当の子を増やそうなんて、思ってないから。」
「……そうですか。別に心配などはしていませんでしたが、今後もあなたと私の2人で高みを目指と考えているなら、当然です。」
アサマは、静かにお茶を飲んではいるが、後ろで尻尾がゆらゆら揺れて動いているのが見え、彼女は、気のせいか少し機嫌がさっきよりも良いように思えた。
尻尾の動きは、彼女の好物である団子を食べてるときによく見たが、何がそんなに嬉しかったのだろうか。
「いや、そういう訳ではなくて。トレーナーを辞めるから、もうスカウトする必要ないんだ。もう、やんなくていいからね。」
酒が進んでいたのが原因か俺は、心の中で言ったことを口に出してしまった。
「ですから。やはり私とあなたは一心同体で……。今、何とおっしゃいました？」
だが今の一言が原因で、部屋全体の空気がピシャリと凍ったのが分

かった。
　正直、酒を飲み過ぎてこの辺りから頭が回らなくなってしまっていた。
「いや、だから今言った通りだって。」
「……理由を聞かせて頂いても？」
「理由？えぇっと……簡単に説明すると俺の目標が達成したからかな。あ、あと、アサマに落ち度は何もないから気にしなくていいぞ。後任のトレーナーに引継ぎもちゃんとするから、安心してくれ。」
　そう説明すると、アサマは勢いよくお茶を飲み干し、湯呑をドンと音が出るほどの力で机に置いた。
　湯呑は割れていなかったが、アサマの様子がさっきまでとは違い、耳の先端が後ろへ向かれ、尻尾は床を叩くように上下している。
「……そうですか。分かりました。あなたの考えは本当に良く分かりましたわ。」
「そうか。じゃあ、俺もう寝るから。詳しい話は、また明日するよ。」
「はい。では、いい夜を。トレーナーさん……。」
　重い体を動かし、千鳥足で布団がある隣の部屋へ向かい、布団へ横になり眠りについた。
　寝る寸前、布団が1枚しか敷かれていなかったのと、少しすると何かが布団に入ってきた感触がしたが、全部酔ったせいだろう……。

　窓から日の光で目が覚めると、二日酔いだろうか鈍い痛みが頭の中を支配していた。
　頭に手を当てながら、起き上がると、敷布団で眠りについたはずなのに、何故か部屋には無かったベッドで眠っていた。
　それだけではなく、部屋自体、泊まっていたものと、全くの別物の部屋に変わっていた。
　誰かが、寝ている隙に移動させたのだろうか。
　でも一体何の為にそんなことをするのだろう。

旅館へは二人でしか来ておらず、貸し切りだった為、自分たち以外の客はいなかったはずだ。
旅館の従業員たちはいたが、こんなことをする理由はない。
様々な考えが、頭の中を飛び交う中、ある考えにたどり着いた。
それは、昔同じような体験をしたことがあり、その経験が生かされた瞬間だった。
部屋にあった机に紙が置いているのに気が付き、見てみる。
内容を確認して、自身に起こっている不可思議な現象が分かった。
どうやら、今さっきまでいた世界とは別の世界に拉致られてしまったようだ。
机に置いてあった紙をもう一度読み直していると、今自分が起きたばかりのベットから、布の擦れる音が聞こえてきた。
「……ん。あなた……。」
「!?」
自分が起きてきたベットから、旅館で着ていた浴衣を両肩が見えてしまうほど着崩しているアサマが、眠そうにゆっくり起き上がってきた。
どうやら、担当していたウマ娘のアサマもセットで移動させられていたのか。
……巻き込んでしまったのなら、本当に申し訳ない……すまない。
紙に書いてある内容が真実なら、この世界は数々のウマ娘達が描かれたアニメの世界に来てしまったのかもしれない。

神の試練

あの時の事を思い出すと、どうしても怖くて仕方がなくなる。
忘れたくても、人というのは、痛みや恐怖などの出来事の記憶は、そう簡単に消えたりしない。
寝ていると、悪夢として何度も蘇る。
最初は何かの悪い冗談だと思っていたが、そんなことは無かった。
気が付いたら、全く見覚えのない部屋で目が覚め、指令のような内容が書かれた紙が、机の上に置いてあった。
最初は信じなかったが、急に紙が燃えて塵になり、その後１０秒ほど経つと、急に立っていられなくなるほど胸が苦しくなり、倒れてしまった。
呼吸が出来ず、意識が薄れていく感覚は、今まで体験したことがない恐怖だった。
急な理不尽に、頭の中の考えがまとまらない中、俺が生き残る為に出来ることは、紙に書かれたミッションをクリアすることだけだ。
ご丁寧に机には、この世界の戸籍などの書類が置かれていて、中にはトレセン学園のでトレーナーとして活動するための書類とバッチが用意されている。
突如として始まった命を賭けたミッションを、俺は死にたくないの一心で、そのミッションを達成し、元の世界へ帰ることを誓うのだった。

……

……

……

親愛なる君へ

『ごきげんよう、トレーナー君。こうやって、君宛に手紙を出すのは初めてだね。私は、神だ。まずは、ミッションのクリアおめでとう。実

に、見ごたえのあるすばらしいモノだった。だから、終わってしまうのが名残惜しくて、もう一周行ってもらうことに決めたよ。勝手に決めてごめんね。でも、今回が本当に最後だよ。神は約束を絶対に守るからね。また同じ設定でも良かったけど、やっぱり違った方が面白いから変えとくね。今回は、前のミッションから約６０年後の世界だ。ちなみに、アニメなどでお馴染みの、スペシャルウィーク、トウカイテイオーやメジロマックイーンのようなウマ娘達がいるから、実際に会えたりするかも。やったね。ラッキー！ちなみに、今回はお供役に君が担当していたウマ娘のメジロアサマを付けといたよ。ステータスとかいじってないから、ほぼ前と変わらないと思うよ。話長かったかな？それじゃ、ルール説明をするね。

ミッション

・担当ウマ娘による　有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念　１着

・担当するウマ娘　制限なし

・期間　１年

・成功報酬　元の世界へ返還

注意

・メジロアサマ以外の第三者の人間、またはウマ娘に、自身の身に起こった事が発覚し正体がバレてしまった場合、死亡処置が行われます。（トレーナー限定）

（その場合、メジロアサマは自動的に元の世界へ返還されます）

・この紙は読み終わり次第、自動的に破棄されます。

・破棄されてから十秒後に、数秒間の心臓停止を実行されます。（トレーナー限定）

神より

最初に、この騒動の元凶である者が書いたのであろう文に目を通し

たのは、メジロアサマのトレーナーだった。
紙に記入されていた内容を大体覚え、隣で不思議そうに見ていたアサマにトレーナーは紙を渡す。
「読み終わったら、机の上に置いとけよ。紙に書いてあるだろ。それ、燃えるから。」
紙を受け取ったアサマは、一通り紙を見て机の上に置くと、突然紙が燃えだしたのに驚いたのか、トレーナーの背中に素早く隠れる。
机には、紙が燃えたことによる焦げ跡どころか傷一つなかった。
トレーナーは、恐怖からか紙が燃えていくのを見て、血の気が引いて顔が真っ青になった。
そして紙に書かれていたが、今回も悪夢として見た『アレ』があったことを思い出した。
「あの、これは一体……」
「……ごめん、後にしてくれ。もうすぐアレが……ッ!?」
突然、トレーナーが胸を押さえて苦しみだし、膝から崩れ落ち、苦しむ姿を見たアサマが、急いで駆け寄る。
「き、来た……む、胸が……」
「!?。どうしたのですか!あなた、しっかりして下さい!!」
今まで見たことがない程、苦しんでいるトレーナーを見て、パニックになりそうなのを必死に抑え込み、アサマはどうすればいいか考える。
「ど、どうしましょう。このままでは、トレーナーさんが死んで……だ、ダメです!そんな事!絶対にダメですわ!兎に角、早くお医者様の所へ……きゅ、救急車!そう、早く救急車を!電話!電話はどこにありますの!」
「アッ。ハァ……ハァっ」
急いで電話を探して部屋を見回していると、アサマの手をトレーナーが掴み、トレーナーに視線を戻す。
「!!あ、あなた、大丈夫ですか!ま、まだ苦しいのですか!待っていてください!もう、私が抱えて近くの病院へ行きますので!」
「だ……大丈夫だ。これは、一時的なものだ……紙にもそう書いて

あっただろう……。」
肩で息をして、発作が終わったのを確認し、過呼吸気味の呼吸を整えながら話す。
「俺も……どういう原理かは分からないが……紙に書いていた通りに実行されたんだ。」
「た、確かにそのような事が書かれていたかもしれませんが……。だからと言って、こんなことが……。」
トレーナーの話を聞いたアサマは、信じられないと言わんばかりに、口を手で押さえ驚愕していた。
紙に書いてあるからと言って、人間の心臓が止まるなんてことはまずない。
だが、実際に起きた不可解で、不気味な出来事を、少しずつ頭の中で溶かして理解していった。
そして、トレーナーも落ち着いてきたのを見て、大きく息を吸いアサマは安堵した。
だが、安心したのもトレーナーの様子がおかしいことに気付き、アサマの頭に不安がよぎる。
いつもうるさいほど明るいトレーナーが、まるで謝るように膝を床につけ体を丸め、握っていた手から分かるぐらい手をブルブルと震わせていた。
その姿は、まるで雷に怯える子供の様に、アサマには見えた。
「……ど、どうしたのです？あなた。まさか、まだ体のどこかが痛みますか？それとも……。」
そして、アサマは気づいたことがあった。
それは、いつも笑顔だったトレーナーからは想像できない、アサマ自身今まで一度も見たことがないものだった。
「……もうたくさんだ。こんなの……。」
トレーナーは、情けないと思っていても、どうしても涙を抑えられなかった。

頼れる相棒

私のトレーナーは、とても明るい人。
私が、まだあの人と契約したばかりで素直になれずにいた頃、キツイことを言ってしまっても嫌な顔をせず、いつも献身的にサポートしてくれていました。
私がレースを1着でゴールすると、まるで自分がレースで勝ったように喜んでくれました。
私よりも喜んでいる姿を見て、それが面白くて不思議とこちらまで、笑ってしまいました。
いつからか、私が勝ちたいから勝つ、家の栄光のためではなく、彼が笑って喜んでくれる姿が見たくて、私は走るようになっていました。
いつしかそんな日々に私は、心から満足だと感じていました。
ただ、一つだけ不安な点がありました。
それは彼は怒ったり、悲しんで涙を流したりなど、人としての弱さを、表立って出している所を、私は見たことがなかったのです。
ですが、レースで勝って彼が笑って出迎えてくれますと、いつもそんな不安はどこか消えてしまうのでした。

いつも頼りにしていたトレーナーの急な変わり具合に、アサマは困惑していた。
いつも明るく笑顔が絶えないとは違うが、トレーナーは人並みには笑っている人であった。
なので、いつも近くで見ていたアサマにとって今のトレーナーの姿は、しゃがみ込み、体全体を震わせ、その姿はとても弱弱しく映り、今回の選択を間違えてしまえば、トレーナーの心の大切な何かが壊れてしまうをのではないかと、アサマには思うほど見えてしまう。
アサマは、今自分に何が出来るか必死に考えていた。

テストでいい点が取れなかったり、レースの結果が散々で落ち込んでいる学友を励ますようにとはいかず、いい考えが思いつかないで焦ってしまう。
言葉で励ます、今の置かれている現状に同情する。
など、上っ面のそんなものでは、トレーナーには届かず意味がないだろう。
アサマが考えている間も、時間は止まってはくれず刻一刻と過ぎていく。
あまり時間を掛けてはトレーナーの精神が持たないことは承知の上だが、どうしてもいい方法を思いつけずにいた。
（……どうしましょう。どうしましょう。……あの人の一番近くにいた私は、何もできないまま見ている事しか出来ないですか。）
何かいい方法はないかと必死に考えるが分からず、両目を瞑るのにも力が入ってしまう。
（何でもいいんです！何か……何かいい方法は……!!）
トレーナーの手を握る自分の手を見たアサマは、雷に打たれたような感覚と一緒に、元気づける方法を考えつく。
アサマには確証はなかったが、これでダメなら本当にお終いだと思いながら行動に移った。

もう、限界だった。
やっと、この呪いから解放されるんだと思っていた矢先に、こんなことになってしまった。
浮かれていた自分自身に腹が立つ。
だが、浮かれてしまうほど精神的に限界だったのかもしれない。
失敗すると自分が、死んでしまうかもしれない恐怖と戦う日々に。
もう2週目をやる元気なんて残っちゃいない。
自分を支えていた何かが、始まりの合図の胸の苦しみと一緒に崩れ落ちてしまった。

このまま、死んでしまった方が、どれだけ楽か。
もう、いっそのことここで終わらせれば……。

「……あなた。顔を上げて下さい。」

全て投げ出してしまおうと考えていると、頭の上から声が聞こえた。
声の主は、アサマだった。
……そういえば、俺はアサマの前で泣いていたのか。
顔を上げろと言われても、今の自分が情けなくて顔を上げられない。
担当していたウマ娘の前で、大の大人が体中を震わせて泣いている。
こんな無様を晒したら、普通なら見捨てられてもおかしくない。
彼女だって、突然こんなことに巻き込まれ、混乱して自分の事で精一杯なはずだ。
なのに、アサマは俺に気を使って声をかけてくれている。
そう考えると、自分自身が惨めに思えた。
もしかすると、アサマは俺に失望したのではないかと考え始めてしまった。
アサマは、なんて俺に言うのだろうか。
『情けない人』と言われて呆れられるか、それとも今の俺のみっともない姿に腹を立てて怒るのだろうか。
……もうどうだっていい。
だから、もうすべてアサマに任せてしまおうと思った。
「……失望したよな。俺の事は、もう構わなくていい。……お前は失敗しても、死なずに期限が来れば元の世界へ戻れるはずだからな。だったら、このミッションに付き合う意味もないんだから。だから、俺の事は捨てて構わない。それに、たかがウマ娘とトレーナーの関係なんだから、手伝うメリットなんてない。あと、安心しろ。直ぐにお前の前から消えるからな。あと……。」

惨めさを紛らわす為なのか、思ってもいないことが言葉として、口から出てしまった。

「……顔を上げなさい。」

怒っているのか上から聞こえた声は、さっきよりも一段声のトーンが下がって聞こえてきた。

これは、少なからず不満や苛立ちを抱えている時に良く起こる。

一体何に対して怒っているのか分からないまま、俺は言われた通りに顔をゆっくりと上げた。

旅館から貸し出された浴衣を着ていたアサマが目に入る。

腰回りに巻かれた細い帯が緩み切って、生地が薄いせいもあり、胸元がらへその辺りまで浴衣を着崩し、白い肌が露わになっていた。

彼女は、そんな事を全く気にする素振りを見せず、ゆっくりと俺へ腕を伸ばし、頭の後ろに回された手が当たると、ギュッと抱き寄せられた。

予想していなかった行動のため、頭がフリーズしかけている所に耳元で声が聞こえてきた。

「……よく、一人でがんばりましたわね。トレーナーさん。」

罵声でもなく、失望して別れの言葉を突き付けられると思いきや、そんなこと考える必要なんて無かったような、優しさに溢れた言葉を聞いて、押さえていた感情が涙と共にあふれ出しそうになるのを必死に我慢する。

「な、なにしてるんだ。……やめてくれ。一体なんだって……。」

後ろに回された手は、俺の頭を優しく撫でる。

まるで、母親が泣いている子供にするような、慈愛で満ち溢れていた行動だった。

「誰にも、相談せずにここまで来るのは、さぞ辛かったでしょう。でも、もういいんです。もう一人で悩まなくても。」

……言葉を聞いて必死に我慢する。
続けてアサマが一呼吸おいて続ける。
「そんな苦しい状況に置かれていたにも関わらず、今まで支えて頂いてありがとうございます。」
……必死に我慢する。
次もアサマが一呼吸おいて続けた。
「私が知る限り、ほぼ休みなく私の為に働きに来てくれましたね。とっても、えらいですわ。」
話を聞くと、そう言えば前では殆ど休んだりしなかった、なんて思い出してしまう。
……我慢する。
またアサマは話続ける。
「私、あなたの弱音を今回初めて聞きました。状況が特殊なのは分かります。表に出さないこともとても立派だと思いますわ。しかし、ため込んだままにするのは、心にも体にも良くありません。ですから、今後は気軽に私に相談して下さいませ。約束ですよ。」
……。
失敗した我が子を、優しく諭すような雰囲気に当てられ、俺は我慢できなくなり、心の底から言葉で言い表せない何かがこみ上げてきた。
でも、あえて言うなら、今まで散々押し込んできた感情が、アサマの優しく温かな言葉に耐えられず溢れ出て、それは前が見えなくなるほどのものだった。

二人で一緒なら

こっちも落ち着きを取り戻した後、アサマの言葉を聞いたがどうしても気になって聞いてみる。
「……俺の事、失望したりしてないのか？」
「どうして失望するのですか？話の意図が分からないのですが……。」
「分からないって……。今の俺の情けないとこ見てただろう！それ見て何も思わなかったのか？」
「ああ、そのことですか。情けないと言うよりは……いつもは見られない一面が見れた位にしか思っていません。ですが……私から一つ、よろしいかしら。あなた。」
アサマはそう言うと、俺の目を見て大きく息を吸って、ゆっくりと話した。
「私は、誇り高きメジロ家のウマ娘、メジロアサマです。そして、あなたは私のトレーナーです。私たちは、一心同体。損得であなたを見捨てることなど決して、しませんし、ありえません。なので……自分を捨てろだなんて、もう言わないで下さい。私も、全身全霊であなたを支えます。ですから……。」
「どうか、私を信じて下さい！トレーナーさん！」

……真剣な眼差しのアサマの姿は、純粋に俺に力になりたいと伝わって、優しい笑顔で俺を見てくる。
「ですので、どうか涙を拭いて下さいまし。折角のいい男が台無しですから。」
そう言いながら、涙が流れ濡れている所を指で拭う。
そんな彼女を見て、俺は心から彼女の心は強いんだと思った。
「……アサマは、強いな。俺とは大違いだ。」
「いえ。私は強くありませんわ。あなたがいるから強くいられるのです。」
「……そうか。」

「なので、私が弱っていましたら、助けて下さいね。私の担当トレーナーさん。」
そう言うとアサマは立ち上がり、俺へ手を差し伸べる。
「……分かった。その時は、任せてくれ。」
彼女が差し伸べてくれたその手は、俺を助けてくれた救いの手だった。
その手を取り立ち上がると、アサマが目をキラキラさせながら話し出した。
「では、あなた。折角なので、町を見に回りましょう！私、窓から見える景色が気になって仕方ありません。一緒に行きましょう！」
そう彼女が指さす窓からは、元の世界ではなかったような建物が見えた。
「まぁ、いいけど……。その格好じゃ……。」
俺の話を聞くと、アサマは視線を下に向ける。
胸の辺りがパックリ割れ、お腹まで丸見えだった浴衣を顔を真っ赤にして直し、どうして言ってくれなかったのかとジト目で訴えかけてくる。
「……スケベですわよ。あなた。」
俺も今気づいたんだ。
許してくれ……。

あの後、家の中を見て回ったが、家には一通り生活に必要な物が揃えられており、リビングにはソファーと大型のテレビ、キッチンには最新式のＩＨ、冷蔵庫など他にも色々あったが、中でも女物の服が大量にある衣装室を見つけ、恐らくアサマの為に用意されていた。
それに比べ俺には、スーツが1着しか用意されておらず、しかもここに来る前に仕事用で着ていた物と同じであった。

更にポケットには、前に使っていた財布が入っていて、中には高価な買い物をしない限り大丈夫な額の金が入っていた。
この差は一体なんなのだろうか。
女物の衣類が沢山ある衣装部屋に入った途端、アサマは目をキラキラさせ服や化粧台と一緒に置いてあった化粧品を見ると、『少しお時間を頂きます。』と言い残し室内に籠ってしまった。
少し時間が経ってから、出てきた姿に驚いた。
旅館での浴衣姿とは違い、黒色がワンポイントのグレーのカジュアルワンピースに身を包んだ、落ち着いた印象を感じさせるファッションで、初見ながら早速着こなしていた。
彼女曰く、着たことがある服に似ているから選んだらしい。
化粧や髪のセットは控えめで、色々調べてから本格的に挑戦するらしい。
変に目立っても困るので、こちらとしてもありがたい。
アサマがそわそわしながら近づいてくると。
「……何か言う事がありますか？」
と聞いてきたので『普通に着こなして凄いな』と返すと、回答が微妙だったか、『あなたは、そういう人でしたわね。』と言い、ため息をして玄関へ向かって歩いてゆく。
彼女なりに、元気のない俺へ気を使ってくれたのだと思うが、何と返せばよかったのか考えながら、アサマの後を追った。

同日　場所　某商店街

今、俺たちは街に繰り出している。
俺がいた時代と比べ今いる現代は近代化が進み、ビルなどが聳え立つコンクリートジャングルへ生まれ変わっており、全く別物であった。
アサマは、そんな街並みをキョロキョロと見回し歩く。
「それにしても、本当に未来の世界なのですね。試しに町中を歩いて

みましたが、見る物すべてが違って見えます。」
「紙に書いていた内容だと、６０年は経ってるからな。そりゃ変わるだろ。」
「!!あなた、見てください！何かありますわ！これも、テレビですわね。凄く薄いですわ……。」
アサマは、電気屋で展示されている薄型テレビを見つけると、『色がついてますわ……。』なんて言いながらまじまじと物珍しそうに見る。
今思えば、あの時代は現代に慣れてた俺にはキツかった。
ネットなんてないし、スマホだってもちろんない。
当時、最先端が白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫の家電であり、自力ではとても買えずアサマに頼んで、メジロ家の伝手で安く仕入れて貰ったのはいい思い出である。
でも、基本的にほぼ学園とメジロ家の資料室にこもって資料見たりして仕事漬けで家に帰っていなかったから、あまり関係なかったと言える。
アサマに一つ今後注意をしなければならない事を思い出す。
「アサマ、あのさ……。」
「なんです？あなた。」
「いや、その俺の事を『あなた』って呼ぶのやめないか？いろいろとまずいと思うんだよな。だから……!?」
不穏な感じがして隣を見ると、アサマはニコニコと笑っている様に見えるが、目は笑っておらず、気のせいか周りに黒いオーラみたいなものが漂って見えた。
「……何か問題がありまして？」
「いや、だって……アレじゃん。俺たちの関係勘違いされるかもしれないしさ……。」
「……そういう関係に見えて何か問題が？」
「ほ、ほら、スカウトした時も言ってたけど、仮にもトレーナーと担当ウマ娘がそんな関係に見えたらまずいし……メジロ家のご令嬢と俺なんかじゃ釣り合いが取れない……。」
「何か、問題が？」

「……何でもありません。むしろ……光栄です。」
「そうですか。では、いい時間になりましたし、あのお店でお茶にでもしましょう。」
そう言うと、歩いていた足を止めて、アサマは近くのカフェを指差す。
「……ウっス。」
正直こうなったアサマには、逆らえない。
まあ、丁度この機会に状況の整理をするのもいいと思い、アサマの提案に賛成し店に入る。
店内は、白やピンクを中心にした内装で机や椅子、小物がメルヘンチックな物で統一され、客層は女性が圧倒的に多い。

「いらっしゃいませ。2名様でよろしいでしょうか？」
白とピンクカラーの個性的な制服を着た店員が聞いてきた。
「はい。二人でお願いします。」
「かしこまりました。……すみません。失礼ですが、お客様お二人の関係をお聞かせ頂いてもよろしいでしょうか？」
「え？はい。自分たちは……」
「恋人です。」
「はい？」
そう言うとアサマは、俺と腕を組んで店員との会話に食い気味に割り込む。
「え？あ。失礼しました。では、席にご案内させて頂きます……。」
「では、行きましょう。」
「いや、ちが……。」
俺の話を聞く前に店員に、ついて行こうとするアサマに腕を引かれ、席へ案内される。
案内された席へ座ると、テーブルに置いてあったメニュー表に、カップル限定スイーツなるものが表紙一面に載っており、反対側に座っているアサマが、表紙を指さす。
「どうしても、外で見ましたのぼり旗に載っていたコレが気になって

しまって、あんな風に言ってしまいましたわ。」
「お前な。そういう事なら前もって聞かせてくれよ。俺を見る店の人の目、明らかに怪しんでたぞ。」
調べてみたが、この近くにはトレセン学園があるらしく、その学生のウマ娘達もこの辺りには多く見られるらしい。
「あら。でしたら、あの店員さんには、私達はどのように見えたのかしら。普通のカップル？それとも、トレーナーと担当ウマ娘の一線を越えた関係……と思われているかもしれませんわね。」
「ただでさえ目立つ行動は控えなきゃならんのに……。勘弁してくれ。」
そう言うとアサマは、『フフッ。冗談です。』と笑って言い、メニュー表を見て頼むものが決まると、店員を呼び注文をした。

注文した品が来るまで静かにコーヒーを飲んでいると、さっきとは違う店員の人が申し訳なさそうに聞いてきた。
「お客様すいません。……相席って可能でしょうか？」
それを聞いた俺はアサマの方を見ると、少し困った表情を浮かべたが『私は、大丈夫です。』と言った。
こっちは問題ないことを伝えると、『ありがとうございます。』と言って席から離れて行く。
それにしても、俺達よりも相手側の方が大丈夫なのだろうか。
俺達は今仮にもカップルとして店にいるわけであり、正直そんなカップルがいる状況の相席なんて気まず過ぎるだろ。
などと考えていると、店員が一人の客を連れてきた。
だが、店員が客として連れてきたウマ娘を見て、俺は驚きを隠せなかった。
……どうして寄りにもよってこのウマ娘なのだと。
名門メジロ家に生まれ、優雅ながら思い上がらない性格と品格を持った、元の世界で史上最強のステイヤーと呼び声高い競走馬が元に

なったウマ娘である彼女。
「突然失礼してすみません。私、メジロマックイーンと申します。」
そういって歩いてきた彼女は、俺が一番推していたウマ娘であった本物のメジロマックイーンだった。
まずい……。
今メジロ家の人間、ウマ娘に接触するのはあまりよろしくないと思い、ここは一時撤退すると伝える為、アサマの方を見るが。
「メジロ……マック……。」
アサマはマックイーンの名前を聞いた瞬間少し考える素振りを見せると、口につけていた紅茶が入ったカップを受け皿に置き、彼女の方へ視線を移す。
「メジロマック……そうですか。あなたが……。」
アサマがそう言うと、急に彼女の周りの空気が凍り付いた感覚に変わった。
そして。
「ええ。私も、あなたとお話したいと思っておりましたので……どうぞよろしくお願いします。メジロマックイーンさん。」
何故か、そう言うアサマはにこやかに笑っていたが、目は笑っていなかった。

最高のティータイム

６０年前　とある思い出

あれは、今でも忘れた事はありません。
家の悲願でもある天皇賞制覇を成し遂げた時、私は彼に想いを伝えようと密かに思っていました。
そして、ついにその時が来ると、私は胸の高鳴りを押さえながら、家への帰る途中の二人っきりになれたこの時に、想いを伝えようと思いました。
ですが、その前に失敗する可能性は限りなく０％ですが、彼が私の事をどう思っているのか気になり、ふとスカウトした時の言葉を思い出し聞いてみることにしました。
その言葉はよく覚えていて、『これはもはや『愛』と言ってもいい！』と彼は言っていました。
その言葉が事実なら、彼は私と出会った時から、そんな情熱的な口説き文句を言うほど、私に気があったということになります。
それは、もう勝ったも同然でした。
……ですが、現実とはこうも上手くいかず、その答えは私が思っていた答えとは違いました。
『あ、それな……。あれさ、もともと別のウマ娘だと思って声掛けたら、後ろ姿が似ていたアサマだったんだよな。だから、あれはアサマに対して言ったわけじゃないから、気にしなくていいぞ。それで、今まで悪い気にさせてたらごめんな。』
……はい？
その言葉を聞いた瞬間、私の完璧な計画は一瞬のうちに崩壊し、思考が一時的に停止しました。
時間が進むにつれて彼の、『アサマに対して言ったわけじゃないから』という発言が頭の中に響き、私に言ったと思った言葉が全て別の『ウマ娘』へ言った事実で、頭の中が真っ白になりました。

同時に、記憶の奥底からスカウトされた時の映像が出てきて、その時別のウマ娘の名前のような事を言っていたことを思い出しました。
確か……『メジロマック……。』と言っていました。
その後、メジロマックと言う名前のウマ娘を探しましたが、名前にメジロとついていましたが当然家の者にその様な人はおらず、勝手にメジロの名を語る不届き者だと思いましたが、結局探しても見つかりませんでした。
段々とムカムカとしたモノが私の心の中を満たし、例のウマ娘について考えると、更に心の底から湧き出します。
これが、嫉妬と言うモノなのでしょう。
ここまで来てもう引くことなどはできないので、私はどんな手を使っても彼を手に入れて見せると誓いました。
このことが切っ掛けとなり私は、水面下で温泉旅館計画を立て始めるのでした。

今、アサマはとても気分が良かった。
にこやかに笑っているも、周りに近づきがたいオーラを出しているが、アサマ自身怒りはなくいたって平常心である。
それは、アサマ自身が抱えていたこの胸のモヤモヤを取り除くことが出来ると確信しているからであった。
紅茶が入ったカップを口に運び、マックイーンを視界の端に収めつつ、アサマは考える。
さて……。
（この人のモノに手を出す卑しい〝泥棒猫〟をどうしましょうか……。）
冷たい視線を送る目は、マックイーンを完全に恋敵として見てい

た。
だが、暴力やウマ娘らしく走りで白黒つけるのは何か違う。
そんなことでマックイーンに勝っても、アサマは嬉しくもなんともない。
そんなことを考えていたアサマに、トレーナーがアサマに手招きをして自分の方に体を寄せるようにさせ、小声で語りかける。
（おい、一体どういうつもりだ。何で、いきなり怒ってんの？面識ないだろ。）
（……これは、私と彼女の問題ですので、あなたは静かにお茶でも飲んでいて下さい。）
（え？いや。俺が言いたいのは、注文キャンセルしてでも、早くここから離れる事が懸命だろ。今、メジロ家の人間、ウマ娘に関わるのは色々とまずい。だから……。）
（あなたには悪いですが、ここは引けません。それに心配しなくても、正体を悟られるようなポカは致しませんわ。安心してくださいまし。）
（いや、だから……。）
「あの……。」
二人の会話を見ていた、マックイーンがウマ耳をシュンと元気がなさげに横に倒し、申し訳なさそうに聞く。
「すみません。私、お二人のお邪魔をする形になってしまいましたわ。邪魔でしたら、断って頂いても良かったのですが……。」
それを聞いていたアサマが、口に手を当て微笑みながら話す。
「いえいえ。全然気にしないで下さい。お食事の時は、賑やかの方がいいでしょうし。ですよね、あなた。」
アサマの微笑みの中で光る鋭い視線を向けられ、トレーナーは直ぐに決められたような言葉が出てくる。
「……ソ、ソウダネ。」
「そうですか。お二人共、ありがとうございます。では、さっそく注文の方を……。」
マックイーンは、近くにいた店員に声をかけ注文し終わると、席が

一緒になった時から気になっていた事を、二人に聞き始めた。
「あの。お二人の関係は……やはり、こ、恋人同士だったりするのでしょうか……。」
「ええ。もちろんその通りです。現在進行形でアツアツのカップルですわ。ところで、マックイーンさんはお一人でここへ？」
如何にも当然だと言うような、自分たちの関係を恋人と言い放った言葉に、トレーナーは唖然とする。
（そんな事言ったら、後々余計な誤解を生むだろうが……。）
苦悩するトレーナーを横に、二人の会話は盛り上がる。
「はい。そうですわ。半額のクーポンを家族から頂きましたので、折角の機会だと思って来てみましたの。このお店が良さそうなら、チームの皆様に教えて差し上げようと。」
「それはそれは。では、教える為にも、お店の料理を味わわなければなりませんね。」
「そうなんです！なので、今日は存分に楽しもうと思っていますわ。それに……。」
「……。」

２人のウマ娘が話の花を咲かせている中、トレーナーは静かに考えを巡らせ、話の輪に入っていなかった。
もともと、マックイーンと店に居続けるのを反対していた為、なるべく話すのは最低限にしようとしていた。
そもそもなぜ、そこまでしてメジロ家の人間を警戒するかと言うと、彼はある一つの可能性を考えていた。
もともと危険視しているのは、この時代で自分たちを知っている人間、ウマ娘であり、６０年という時が経った今、早々自分たちを知っている人間などは、ほぼ出会わないと考えていた。
だが、ある人物の存在が立ちはだかった。
その人物こそ、彼らの正体にたどり着ける存在。
それこれ、メジロ家の頂点に君臨する【おばあさま】である。
もし、自分たちを知らない人間が当時の写真を見たりしても、６０

年の時を超えてやってきたなどと普通は考えない。
せいぜい、他人の空似で済む話。
だが、【おばあさま】がこの時代のアサマ本人であれば、些細な癖や性格などから違和感を感じ、自分自身ではないかと気づかれ、調べられ、彼らが過去から来たと言う真実にたどり着けられるのかもしれない。
なので、なるべくその【おばあ様】に会わなくする為にも、メジロ家の人とは距離を取っておいた方が安定策。
（ここは、頼んだ料理を速攻で食べつくして、食べ過ぎて腹痛いって事にして帰ろう。）
他にも、今後の活動の為にもマックイーンに顔を覚えられる前に、一刻でもここから立ち去りたいトレーナーは、早く頼んだ料理を平らげてこの場を離れてしまおうと考えた。
こうでもしなければ、アサマが帰らせてくれないと思ったからであった。
トレーナーが静かに考えを巡らせていると、料理が運ばれてきた。
「お待たせしました。こちらが、【カップルのお客様専用ラブラブパンケーキＧＸ】でございます。」
そう言って運ばれてきたのが、大皿に十段以上のハート型のパンケーキが重ねられ、上からたっぷりの赤いイチゴソースがかけられたデカ盛りスイーツであった。
（は？ちょ、デカすぎだろ……。）
想像の倍以上のパンケーキに圧倒されているトレーナーを他所に、アサマはパンケーキの一部をナイフで切り、フォークで２枚ほど刺し赤いソースをたっぷりつけ、彼の口元へ送る。
「では、あなた。口を開けて下さい。あ～んです。あ～ん。」
「いや。自分で食えるからいいって……。」
断るトレーナーを不思議そうにアサマは眺めながら話す。
「知らないのですか、あなた。この〝らぶらぶぱんけーき〟は、互いに食べさせ合わなければいけないのです。メニュー表に書いてありましたし。」

「え？いや。そんな訳……ホントに書いてある……。」
メニュー表の説明曰く、【パンケーキで、お互いの幸せを分かち合いましょう！二人の愛の力があれば何も怖くはありません！なので、一人で食べるのは禁止！】と書かれていた。
「ですので、観念して口を開けてください。はい、あ～んです。」
「……。」
トレーナーは、かなりの量があるパンケーキを見て、この量を食べきるのは何時になるのかと絶望していると、フォークをグッと差し出すアサマから、マックイーンに視線を移す。
「こ、こんな人前でこんなことを……。!!わ、わ、私の事はお気になさらず、どうぞ!!」
マックイーンは、二人の姿を見ると、顔を真っ赤にして違う場所へ視線を移すがどうしても気になり、チラチラとトレーナーを見てしまう。
（……もうこうなったら、やるしかないか。）
そう思ったトレーナーは、このメガ盛りスイーツを完食するべく、アサマの差し出していたパンケーキに食らいついた。

そして、アサマは思った。
『私の、勝ちですわ。〝メジロマックイーンさん〟』
この時、アサマはマックイーンへ静かなる報復を果たしたのであった。

敗北寄りの勝利

喫茶店でバイトをしている中山あかりは、今まさにとんでもないミスをしてしまったと後悔していた。

この店は客の入りが多くなり、席に余裕が無くなると、相席をお願いするシステムがある。

もちろん相席の事を伝え、互いにＯＫが出たら、席へ案内をするようになっている。

そんな中でもこの店の店員達の間には、ある決まりごとがある。

それは、カップルで入店された客には、相席をさせないこと。

これは、カップル客を贔屓している訳では無く、同席する側、カップル側の人達への店側の配慮。

単純な話、案内される客からすると、カップルがイチャイチャしているのを目の前で見せられながら、食事をしてもらうと言うのも、正直居づらいと感じる為であるから。

カップル側も同様で、二人だけの空間へ第３の人間に入られたら、あまりいい気はしないだろう。

なので、この店は基本的には、カップルが座る席には相席は頼まないと言うのが鉄則であった。

だが、中山は男の存在を見忘れ、カップル席へ一人客で来店したウマ娘を案内してしまう。

気づかなかったのは、彼女が３６時間連続で某大人気ＦＰＳをプレイし続け、寝ずにバイトに来た為の睡眠不足による注意不足が原因であり、先輩の指摘で自分がしでかした事の重大さを知った。

座っていた男女も、カップル限定でしか頼むことが出来ない【ラブラブパンケーキＧＸ】を注文する程であり、アツアツぶりの二人がいる席へ一人のウマ娘、それも人気ウマ娘の一人であるメジロマックイーンを案内してしまった。

気が付いた時には遅く、カップル側の男が気まずさからか、顔が真っ青になっていたのが見てわかる程であった。

今すぐ別の席へ案内しようと思うが、他の席は空いていない。

中山は、自身の顔から血の気が引いていくのが分かったのだった。
彼女のミスが原因となり、運命のいたずらか、普通なら出会わなかったはずの両者が相対する結果となってしまうのであった。

マックイーンは、目の前で起こる事に釘付けになっていた。
本来の目的は、この店のスイーツだったが、今は自身が見る初めての光景に驚きを隠せずにいた。
(こ、これが男女の『あ～ん』……。み、見ているこっちが恥ずかしくなってきますわ……。)
恋人同士の触れ合い(あ～ん)に顔を真っ赤にし、目を奪われるマックイーン。
たじろぐマックイーンを見て、アサマはニヤリと表情が崩れてしまうのを我慢する。
この瞬間、アサマはマックイーンに対し、自身の勝利を確信した。
アサマは、このパンケーキについては当然知っていたし、これこそが彼女が考えついたマックイーンへの挑戦方法。
これこそ、【目の前でイチャイチャし、自分とトレーナーの仲の良さをアピールしつつ、あなたが付け入るスキは一寸たりともありませんわ】作戦であった。
アサマは、今まで存在も怪しんでいた自分より先にトレーナーに思われていたマックイーンに、自分達の関係をこれでもかと見せつけている現状に、彼女は今まで体験したことがない程の優越感が襲い、背筋に何かゾクゾクする感覚が走った。
同時に、前から感じていた胸のモヤモヤがスッと消えていく事にアサマは胸のつっかえが取れたようなすっきりした感覚を味わった。
(これで十分だと思いますが、最後に念のため……。)
だが、彼女の進撃はここで終わらず、更に追撃という形で、パンケーキを頬張るトレーナーである彼の口についた赤いソースに目を付けた。

「あなた。口にソースがついていますわ。」
そう言うとアサマは、人差し指をトレーナーの口に近づけ、指で赤いソースを拭き取り、そのまま指を自身のピンク色の唇へ近づけ、ペロリと舐め取る。
トレーナーもアサマの急な行動に驚くが、マックイーンは彼以上に驚き、目を白黒させる。
（こ、こ、こ、この方達は、一体何をしているのですか!?!?!?）
アサマの一連の行動に釘付けになっているマックイーンに気が付くと、彼女は如何にも余裕の笑みを浮かべた。
「あら？マックイーンさん。そんなにこちらを見て。私の顔に何か付いていまして？」
「……ふぇ？い、いえ。すみません。な、何でもありませんわ。」
「フフッ。そんなに食い入るように見られますと、私も少し恥ずかしいですので……。」
「す、すみません……。わ、私、少し外の空気を吸ってきます……。」
見ている事を指摘されたマックイーンは、相手に聞かれてしまうほど見てしまっていた自分が恥ずかしくなり、おずおずとした調子で席を立ち、店の外へ離れてしまった。
（少し、やり過ぎてしまったかしら？）
アサマは、そんな外で深呼吸をするマックイーンを窓からチラッと見ると、再度トレーナーにパンケーキを食べさせる。
黙々と食べるトレーナーの姿を見てニッコリと笑顔がこぼれた。
またトレーナーに食べさせる為、パンケーキを食べやすい大きさに切り分けていると、突然途中でアサマの手が止まってしまった。
そして、アサマは数秒程止まったままでいると、そのまま両手に持っていたフォークとナイフを静かに皿の上に置く。
すると、熟れたリンゴのように顔を真っ赤にさせ、視線を下に逸らしてしまう。
その様子を、もう容量限界寸前まで食べ、腹をパンパンにしているトレーナーが困惑しながら見ていた。

（ど、どうしたんだ？急に、供給が止まったと思ったらこれは一体……。）

そんな、目の前にフォークで差し出されるパンケーキをひたすら食らいつくトレーナーを他所に始まった、女の闘い（アサマの一方的な）は予想外の形で決着が着くのであった……。

アサマ視点

これほど嫌でも見せつければ十分でしょう。

たじろぐ彼女の様子を見れば分かりますが、どうやら効果ありのようですわね。

戦う前から勝敗は決していたのです。

彼と出会えた事、その運も実力のうちなのですから、悪く思わないで下さい。

マックイーンさん、少々相手が悪かったですね。

しかし。

メジロ家内で、天皇賞を制覇した家の誰よりも名高いウマ娘である【メジロアサマ】である私に、レースならまだしも、今まで私を陰ながら支え続けたトレーナーである彼で勝負を挑むとは、随分私も舐められたものです。

ですが……まぁ……。

最初の頃は、どこぞのウマの骨かと思っていましたが、実際こうして会ってみますと……まぁ、出会ってまだ数分ではありますが、彼女の立ち居振る舞い、礼儀作法から十二分に、将来メジロの名を背負うだけのウマ娘なだけはありまして、良く教え込まれています。

どうやら、彼女を見る限り未来でも家は安泰なのだと思うと、少し安心しました。

ですが、まだ彼女からは若干の幼さを感じさせますし、メジロ家を支えるにはまだ若いですね。

学年も中等部といったところでしょうか……まぁ……まだまだこれからと言った所でしょうか。
それにしても、こう彼女を見ますと、彼が私と見間違えるだけはありますわ。
身長やスタイルの話は置いておきますと、顔立ちや雰囲気などはどこか私に似ている点があるように感じますし、少し髪質が違いますが、髪の色などは私と一緒ですわね。
後ろから見れば、確かに私と見間違えても不思議ではないのですが、そもそも身長は明らかに私の方が高いはずですし、後ろから見ても判別できそうでありますが……。
まぁ、これに関しては、彼に問題があったとしか……。
ですが……。
自分に何処か似ている彼女を見ていると、不思議とこんなことを考えてしまいます。

〝まるで私の生まれ変わりのよう〟……だと。

……などと、変なことを考えてしまいました。
まさか、そんな訳がありません。
何故なら、私は今こうして生きているのですから。
なので、まだ私は死んではいませんので、生まれ変わりなどではありません。
そう、私自身もこうして生きていますし。
では!?!?!?!?他に考えられる可能性は……。
……!?!?!?!?
ま、まさか……。

その瞬間、アサマの頭の中に電流走る。
６０年後の未来、メジロ家、自身に似た顔立ち、髪の色、これらの

ワードから、それだけの情報だけで容易く、答えであろう結論にアサマはたどり着いてしまった。
（まさか……このメジロマックイーンと言うウマ娘……。）
（いえ。もしかすると、この子は……。）
（もしそうだとするなら、彼がいますし、娘にしては若すぎます……。）
（となると……ま、まさか！そんなことが……。）
（ですが、そうなると私はこの子になんて事を……。）

彼女は……。

（私の、孫なのでは……。）

その考えにたどり着いた瞬間、フォークとナイフを置いたアサマに今まで経験がないほどの羞恥心が襲い掛かった。
（では、私は……。孫相手に躍起になり、彼を取られまいと、大人げなく彼と今までイチャイチャしていたというのですか!?孫の目の前で！それも、この子に見せつけるように!!）
（ああ。こ、これでは、浅ましいのは一体どっちなんですの！栄光あるメジロ家の血を引く私が、なんてことを……。）
（こ、こんなに恥ずかしい思いをしたのは……は、初めてですわ……。あ、穴があったら入りたいです……。）

こうしてアサマが一方的に始めた闘いは、敗北寄りの勝利という結果で終わったのであった。

彼女は苦悩し、彼は感謝している

あれから食事を終え、店を後にし、マックイーンと別れた二人は、現在、最初に自分たちが居た家への帰る途中で、家への近道であった河川敷を歩いていた。

ふと、トレーナーは、つい先ほどまでいた店でのことを思い出していた。

アサマが顔を赤くしてから、マックイーンが外から戻ると、マックイーンに対しての態度が一変していた。

敵意は消えさり、純粋な笑顔で彼女の為に追加で料理を注文をしていた。

その姿は、素顔が似ていることもあって、周囲にはまるで心優しい姉のような存在に見えるほどであっただろう。

だが、トレーナーを驚かせたのはこれだけではなく、アサマが何故かマックイーンが頼んだ分の代金を支払うと言ってきたのであった。

最初は、トレーナーも急なアサマの提案に動揺するが、アサマの『この子は、もはや私の娘のようなものです!』と言われ、渋々説得されてしまう。

ただ、払った金額が思った数倍高かったのに驚いていたが、トレーナーは何とか払いきった。

しかし、席を外していたマックイーンは、二人が店を出た後で、支払いが終わっている事に気付き、お礼も言えずに別れてしまったのだった。

別れる前にそんなドタバタがあったが、今はそんなことがあった後とは思えないほど、周りは穏やかであった。

だが、そんな夕焼けが周囲を赤く照らす中、二人は横に並び歩いていると、トレーナーの隣にいたアサマが急に止まってしまう。

アサマは、話したりせず俯き、ウマ耳はペタリと元気なく倒れ、尻尾にも力が入っておらず、一目で何か思い悩んでいるように見えた。

明らかに店にいた時と比べて元気がないように思えたトレーナー

は、不思議に思いアサマに聞いた。
「どうした?急に止まったりして。気分でも悪いのか?」
「そんなことは……。いえ、やはり言うべきことがあります。」
そう言うと彼女は、頭を下げ始めてしまった。
「先ほどは、申し訳ありませんでした。舞い上がって私欲を優先し、軽率な行動をしてしまいました。すみません……。」
アサマは、先ほどの店での自身の行動についてトレーナーに謝りだしたのだった。
これは、彼女なりのケジメであり、もしあの時に正体がバレてしまっていたら、この偽りの日々も終わっていたかもしれない。
自分が最も大切だと思う人を、自らの行動のせいで危険に晒してしまった。
このことに気が付いたアサマは、自分がしてしまったことに後悔しながらトレーナーに謝るのであった。
突然、アサマが謝りだしたことに、トレーナーは驚き数秒間止まったままになってしまうが、直ぐに今の状況を把握し、言葉を返した。
「おい。止めてくれよ。頭を上げてくれ。」
「いえ。そういう訳にはいきません。私の迂闊な行動であなたの命を危険に晒してしまいました……。」
「いや。マックイーンについてなら、大丈夫だ。あっちはこっちの正体に一ミリも気づいていなかった。だから気にすんなって。」
「ですが、私は自分自身が許せないのです。目先の私欲を優先してしまい、あなたの事を何も考えていませんでした。」
アサマは謝り続けるが、トレーナーからの気遣いの言葉が逆に、彼女の心へ響いた。
「ですから、お願いです!どうか、私の事をキライにならないで下さい!怒って頂いても結構ですから……。どうか……。」
アサマは、弱弱しく声を震わせながら言葉を続け、その姿は彼女自身が理想とする気品と自信に満ちた姿とは、真逆のモノであった。
だが、彼女はそんな今の自身の姿に何か思うほどの余裕はなかった。

アサマは、最悪の返事を思い浮かべてしまい、スカートの裾をギュッと握り必死に涙をこらえる。
「あなたに捨てられてしまったら私は……生きていけません。」
「……」
まるで、神に祈るような、その言葉を聞いたトレーナーは、頭を下げて謝るアサマから目を離し、夕日が沈んでいく街並みを見ながらゆっくりと話し始めた。
彼自身、アサマが思っていた怒りなどの感情は全く無く、むしろ逆であったとも言えた。
「アサマ……。俺は、今も感謝してるんだよ。」
トレーナーの急な発言に驚き、アサマは頭を上げ彼の横顔を見つめる。
「……感謝、ですか？。……それは一体どうして……。」
「……前は、一人だったから。誰にも相談することだってできなかった。だから、全て一人で考えてた。」
トレーナーは、この時代に来る前は、自身の担当のウマ娘でさえ、真に心を許してはいなかったが、今は違った。
「だけど、今回は違う。相談して、迷った時は二人で考えて決められる。アサマがいなかったら、最初に心を折られたままで、立ち上がれなかったと思う。前の環境とは雲泥の差だ。」
彼の本音ともとれる言葉に、アサマは目を見開き、聞き入ってしまう。
「だから今、この瞬間にも助けられてるよ俺は。」
「そ、そんな大げさです……。」
「いや。そんなことない。それに、アサマが謝る事じゃない。真に悪いのは、こんな状況にしくさった自称『神』って奴だしな。」
「ですが……。」
「それに……今からおかしなこと言うぞ。」
そう言うとトレーナーは、視線をアサマへ戻すと、ばつが悪そうに頭の後ろを掻く。
「俺は、自分の命が掛かっているってのに……今が楽しいんだ。」

「へぇ？」
　トレーナーの言葉の意図が分からず、アサマは頭にクエスチョンマークを浮かべる。
「……おかしいだろ。失敗すれば、死ぬかもしれないって言うのに、お前が楽しそうにしてると何故だか、こっちまで楽しいんだ。」
　そんなアサマを見ながら、トレーナーは気まずそうに話す。
「だから、今のままでいい。自分を責めずにそのままの【メジロアサマ】でいてくれ。そんで、一緒にこのふざけた試練をクリアしよう。相棒！」
「あ……あなた……。」
「だから……まあ……あれだよ……。」

「いろいろと……感謝してる……。……あ、ありがとな。」

　その瞬間、アサマは見た。
　今まで見たことが無いほど、トレーナーの頬が赤くなってる所を。
　夕日の光に照らされ、トレーナーの顔が更に赤さが濃く見えた。
「……すまん。今のやっぱナシだ。わ、忘れてくれ。」
　そういったトレーナーは、反対側を向き、帰り道を足早に歩きだしてしまう。
「はぁ……。本当に、あなたという人は……。」
　その姿を見たアサマは、小走りでトレーナーに追いつき隣を歩く。
「……分かりました。それでは、早く帰りましょう。」
　いつの間にかアサマには、謝罪しようとする考えは綺麗に消え去り、今自分自身がやりたいことをやろうと思っていた。
　そう言うと、アサマは彼の腕に自身の腕を絡め、彼の腕にもたれ掛かり、トレーナーにウマ耳が当たる距離まで二人は近づく。
　この行動が原因か、アサマの顔も真っ赤になっていた。
「少しだけ……。帰る間だけでいいですから……今だけ……このまま帰ってもよろしいですか？」
「……分かった。」

「私、あなたのそういうところ、好きですよ……。」
「……。」
「お顔、真っ赤でしたわよ。」
「……あ、あんまり、揶揄わないでくれよ……。」
夕焼けに照らされた二人の後ろには、一つの影がその後をゆっくりと付いて行く。
そうして彼女たちは、この先どんな未来が待っているのか分からない明日へ不安や期待を胸に秘め、夕日に照らされながら帰路につくのだった。

場所・メジロ家所有の邸
お風呂に入った後、髪を乾かし終わり、いち段落ついた今、私はライバルであり友でもある、彼女へ通話をしていました。
『へー、そのお店そんなに良かったんだ……。じゃあさ、今度チームのみんなと一緒に行こうよ！マックイーン！』
『それはいい考えですわ！そうしましょう。ですが……。』
『ん？どうしたの。マックイーン？』
『いえ。今日お店に行った際、席に余裕が無かったので、知らない方達と相席をしたのですが……。』
『へー。珍しいね、マックイーン。僕、今までそんなこと一回もないよ。……ってなになに。一緒になった相手がどうしたの？』
『その……。とても親切な方々で、私が席を離れている間に私の分の代金を払ってくれたのです。戻ってきた時には、もうお帰りになった後だったので、ちゃんとお礼を伝えられずに別れてしまいましたの。ですので、もう一度何処かで会えたらいいのですが。今思えば、どうして見ず知らずの私にそこまで……』
『ふ～ん。ちなみに、一緒になった人って男の人だったりした？』
『え？はい。男性でしたがあと……。』
『えええええ!!じゃあ、マックイーン！その一緒になった人の事好きに

なっちゃたの?ご飯奢って貰っただけで!?流石にちょっとチョロすぎだよ!!』
『そ、そんな訳あるわけないでしょう!!全く違いますわ!別に好きになったりしていません!あなたは何を言ってるんですか!!』
『え?そうなの?なんだ、つまんないの。』
『ですが……。何と言いますか……。あの方々、初めてお会いしたのですが、何故か初めて会った気がするような、しないような……。』
『ん?どういうこと?まさか、運命の人とか言うんじゃ……。』
『違います!!全く、どうしてあなたはそう結論を急ぐのですか……。それに、一緒になったのは、男性の他にお連れのウマ娘の方がいらっしゃって二人ですわ!』
『ふ～ん。二人組ってことは……。もしかして一緒になった人達、カップルだったりしたのかな?』
『ええ。私の見た限り、そういう関係だと思います。もしかしますと、私達が想像もつかない次元へ進んでいるのかもしれません。私の目の前であんなことをしてたのですから……。』
『え?あんな事って……。まさか!?』
『ええ。察しがいいですわね、〝テイオー〟。まず最初に……。』
自身がこの目で見た光景を思い出し話すマックイーンは、話していく内に湯船でのぼせたような真っ赤な顔になりながら、今日の出来事を詳細に伝えた。
それを聞いていた〝トウカイテイオー〟も、テレビや本などでしか見たことがない事が、現実で行われていると知った途端、彼女も顔を真っ赤にして熱心にマックイーンの話を聞いていたのだった。

二人の挑戦者　前編

日本ウマ娘トレーニングセンター学園。
ＵＲＡが管轄するものでは日本最高峰のレベルとされており、生徒数は２０００人弱。
在校生は皆、国民的スポーツ・エンターテイメントとして位置付けられている「トゥインクル・シリーズ」への出場と勝利を目指しているが、その華やかさとは裏腹に生徒も教職員も地方では異次元レベル扱いされるようなエリートたちがしのぎを削る戦場でもあり、活躍できるのはほんの一握り。
ケガや戦績の悪さが原因で学園を去ることになった者も数多く存在する。
そんな過酷な世界が当たり前のトレセン学園へ入る正門の前に、二人が立ち並ぶ。
一人はウマ娘でもう一人は、人間の男性であった。
二人の周りには、この学園に通う生徒のウマ娘やここに勤める職員などが、彼女達を通り過ぎ門の中へ向かって行く。
何もおかしなことはない光景だが、門の前に立つ二人、特にウマ娘の方に周りの視線が集まっていた。
その視線を集める原因は、男の方でなく、ウマ娘の方にあった。
彼女の近くを歩いた者達は、背筋が伸び凛とした佇まい、整った容姿、体全体を纏うオーラが明らかに一般人とは思えない姿につい見とれてしまう。
それだけではなく、彼女の動き一つ一つは気品に満ち溢れ、まるで彼女の周りがキラキラと輝いて見えた。
それらを見て、彼ら彼女らは、ただ一言【美しい】という言葉が自然に浮かび上がる。
そんな、昨日まで見たことがない謎のウマ娘の存在に、段々と疑問に思う言葉が声へと変わり、彼女の周囲をざわつかせた。
「ねえねえ。さっき門の所にいた人ってさ……。うちの制服着てたから、学園の人かな？」

「凄く綺麗だったね。あんな綺麗な人、学園にいたっけ？」
「私は見たことないかな。多分、どっかからスカウトされてこっちに来たんじゃないの？」
「なんか見た感じ、お姫様みたいだよね。そうじゃなきゃ、あんな近寄りがたい雰囲気周りに出せないでしょ！」
「何なの？なんか気品あふれる感じって言うかさ、私と同じ庶民とは思えない……。」
そんな周囲の反応をもろともせず、正門からトレセン学園へ足を踏み入れる。
その突如として現れた見慣れないウマ娘の情報は、あっという間に学園中に広まり、この学園の誰よりも目立ってしまうのだった。

1日前　時刻　２１：００　　場所　自宅

「分かっていると思うけど、一応説明するぞ。学園で俺達がしなければならないことを。」
「はい。確認は大事ですものね。」
リビングにある木製のテーブルに座るトレーナーが真剣な顔つきで聞くと、メルヘンチックな白いルームワンピースを着たメジロアサマが、反対側の席に座って答える。
テーブルには、雑貨屋で買ったハート柄のペアマグカップが置かれ、アサマは優しく両手で持つと、中に注がれた紅茶を口に含む。
そんな彼女の姿を見ながら、トレーナーは話を続ける。
「いいか？俺たちの最終的な目標は、有《ｆｏｎｔ：ｕ１４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念で1着を取る事。これがクリアされないと、俺は死んでしまうし、アサマは元の時代へ帰ってしまう。」
「はい。その通りです。」
「では、アサマさんに突然ですが問題です。その有《ｆｏｎｔ：ｕ１４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念にどうすれば、出場できるでしょうか？」
アサマは、急な質問に驚くも、マグカップをそっと置き、『そうです

ね……。』と言いながら考え始め、１０秒も掛からないほどの時間で答えを出した。
「やはり、レースでの結果……では？ちゃんとした実力があると証明できた人しか出れない……と言うことではないのですか？」
　改めて考えてみるとどのような基準でレースに出場できるのか、アサマ自身もイマイチわかっていなかった。
「まあ、確かにレースでの勝利数や獲得賞金の額、それらも選ばれる理由の一つなんだが、この有《ｆｏｎｔ：ｕ１４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念と言うレースでは、他に重要な事がある。決して楽な道ではないがアサマには、文字通り走り抜けてもらう。」
　アサマは、それが元も重要な役割だと信じ、緊張感が高まるのを感じ取った。
「わ、私自身がそのような重要な役目を……分かりました。例え、どんな苦難が待ち受けていようと、必ずあなたの期待に応えてみせますわ。」
　そして彼女は、絶対にメジロの名に相応しい働きをすると意気込み、彼の言葉を待つ。
「ありがとう。少々、遠回りな言い方だったが、お前には、選手としてだけじゃなく、〝アイドル〟としても活躍してもらう。」
「あい……どる？……ですか？」
「ああ。歌って、踊れて、走れるウマ娘のアイドル。それも、有《ｆｏｎｔ：ｕ１４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念はファン投票上位１６名に選ばれるとレースの出場資格が出るから、嫌でも誰もが知るトップアイドルになってもらう！」
　有《ｆｏｎｔ：ｕ１４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念のレースでは、ファンの投票数も大きく関係し、もちろん距離適性などの審査が入るが、基本的には実力が見合い、投票数が多いウマ娘に出場権が与えられる。
　なので、アサマにも少なからず、有《ｆｏｎｔ：ｕ１４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念までに自身を応援して投票してくれるファンを獲得しなければならない。

だが、トレーナーが言った様にそう簡単にはいかない。
レース成績が良くても、ファンからの支持を集められず出場できない、と言うのも珍しくない。
しかし、ファンを集めることに力を入れ過ぎてしまえば、今度は肝心なウマ娘としての走りの技能が足りなくなる。
実力と投票数、二つをバランスよく高める必要があり、何万人という応募者の中でも実力とファンの投票数が上位１６位以内でなければならない。
だが、その有《ｆｏｎｔ：ｕ１４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念で見事勝利できたのなら、ウマ娘の中でもトップクラスの実力を持ち、その上多くのファンの指示を得ている証明になり、ウマ娘なら誰もが憧れるとても名誉な事である。
アサマは、トレーナーの話を聞いて、口を開けたまま固まってしまう。
（流石に、いきなりトップアイドルになれって言われたら、そりゃ動揺するに決まってるわな……。）
その様子を見たトレーナーは、いきなりこんなことを言われて、プレッシャーになっているのではと心配になり、声をかける。
「あ……まあ。大丈夫だ。俺も全力でバックアップするから。だから、あまり重く考えなくてもいいぞ。」
「あの……。」
心配して話すトレーナーを他所に、アサマは、不思議そうな顔で尋ねた。
「その、あいどる？とは一体何なのですか？」
「え？ああ。そっか。昔にはなかったか……。えっと……。アイドルってのはな……。」
トレーナーは、そばに置いてあったタブレットを手に取ると、【ウマ娘　アイドル】と検索をかけ、それっぽい画像や動画を見せながら、アイドルとは何なのかとアサマに説明し、今後アサマ自身がどの様になって欲しいと思っているかを伝える。
だが、タブレットの画像を見ていたアサマのウマ耳は、先の部分を

後ろへ向けて倒すようになり、目はグルグルと回し、みるみる顔を真っ赤になり、頭から煙が上がっているのではと錯覚するほど燃えるように、上気していく。
そして、椅子から立ち上がり、トレーナーに勢いよく喋り出した。
「あ、あなたは本気で私に、この方達と同じような事をしろと言うのですか!?」
急なアサマの変わりようにトレーナーは驚くが、お構いなしに彼女は続ける。
「こ、こ、こ、こんな、胸の上の部分が見えてしまうほど、胸元は開けられ、お腹の辺りは、おへそが丸見えになってますし、おまけにスカートに至っては、丈が太ももの半分ぐらいで、先ほどの見た映像では、ウマ娘の方が跳ねた拍子にスカードが舞い上がり、し、し、下着が見えてしまって……。しゅ、衆目が集まる舞台の上でこのような事をするなど……これではまるで痴女ではありませんか!!わ、私、このような衣装着られません!?」
これほど言っても、アサマの勢いは止まらない。
「あ、あなたは、わ、私が大勢の前で、このような恥ずかしい格好をしていいと本気で思っているのですか!?それにです。将来、栄光あるメジロ家を継ぐであろう私が、このような事をするなど、許される訳ありません!?いくらあなたでも、正気を疑いますわ!!」
アサマの言い分として、肌の露出が多い服装は、あまりいいものとされておらず、自分と将来を誓い合った人以外の他人に、気軽に肌を見せる服装を着ることは、余り褒められた行為ではないと教えを受けていた為、彼女にはアイドルに対して若干の拒否反応が見られた。
思った事を言い終わったのか、アサマはハッと我に返ると、コホンと咳をして、静かに椅子に座った。
アサマの、想いを聞いたトレーナーは、申し訳なさそうな顔を浮かべて謝った。
「……確かに、そうだな。急にトップアイドル目指せなんて無理だよな。すまん。俺、アサマなら、素顔も美人で、スタイル抜群で綺麗だから、おまけにウマ娘としての実力もあるから全然、ファン投票数も

1位でいけると思ったんだよな……。」
「ふぇ!?（び、美人!?き、綺麗!?）」
トレーナーの言葉に、それも、『綺麗』と言う単語を聞いた瞬間、尻尾は荒ぶり、ウマ耳の先が力強くピンっと天井へ向き、恥ずかしさから、あさっての方向を見てしまう。
トレーナーの不意打ちとも言える褒め殺しに、そんな教えはどこかへ消えて無くなってしまう。
アサマは酷く動揺するも、再び悩み始め自身が出した結論は、さっきとは一転した答えに変わってしまう。
「そうだよなぁ……。ホントにすまなかった。今のは聞かなかった事に……。」
「あ、あの……。」
アサマは、おずおずと気まずそうに、トレーナーへ自身の考えを伝え出した。
「やっぱり。私、アイドルとしてもやっていきます。あなたは……わ、私が、き、綺麗だから出来ると……。そう言うのですから。あ、あなたがそこまで言うのですからね。メジロの誇りにかけて、やらない訳にはいきませんわ!!」
「おお!?ホントか！ありがとうアサマ!!この作戦でいけば、有《ｆｏｎｔ：ｕ１４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念優勝も夢の話じゃないぞ!!」
「いえいえ。私こそ、先ほどはすみませんでした。興奮して我を忘れて言い過ぎてしまいましたわ。それにです……」

その日アサマは、ベットで眠る時にトレーナーに言われた言葉を思い出し、胸の鼓動がうるさく、なかなか寝付ずに夜更かし気味になりかけた。
（美人、綺麗、スタイル抜群……ですか。フフフッ……。）
名のあるメジロ家のウマ娘と言えど、乙女心にトレーナーが絡む

と、彼女は物凄くチョロかった……。

二人の挑戦者　中編

「……以上でこの学園の説明は終わりだ。何か質問はあるかい？青島トレーナー君。」

トレセン学園で毎年新人トレーナー達に、学園内の案内や説明をしてきた初老のトレーナーは、今年もその仕事の為目の前に立つ、今年からトレーナーとして勤める、青島と言う男に尋ねた。

「いえ。特にはありません。」

「そうか。それなら良かった。他に何かあったかの……あ、一応知っていると思うが……。」

初老の男の話を聞き始めた青島は、予期せぬ話の内容に焦り、聞き返してしまう。

「今の話……本当ですか!?、書類等には何も……。」

「確かに、書類には書かれてない。だが、これは言わば、ここに勤めるトレーナー達の間では、当然のルールとして知られておる。君も、もちろん対象だ。」

「……。」

アサマと別れた後、トレーナーとしての業務を務めていた矢先、先輩トレーナーから聞いた内容に驚きを隠せずにいた。

当の本人も、この点に関してはノーマークだった。

彼が昔勤めていたこのトレセン学園も、６０年と言う時が進んでいるのだけあって、当時には無かった機材や設備、新しいトレーニング理論、上げればキリがないが、そんな中でも、決まり事や学園内でのルールなども当然変わっていた。

だが、それは不幸にも、今回彼はその変わってしまった学園のルールに牙を剥けられてしまう事態になってしまう。

「これは……まずい事になった……。」

彼の顔は青ざめ、額には冷や汗が流れていた。

アサマは、頭の片隅でアイドルについて話した日の事を思い出しながら、ターフコースの芝の上を歩く。
その影響か、レース前だというのに、アサマは自然とにやけてしまっていた。
最初は、否定的に考えていたアイドルと言うものも、今になっては彼女にとって、目指すべき目標へ変わっていた。
そんなアサマは、制服から体操服に着替え、ウマ娘のレース用の靴で芝の感触を楽しむ。
朝に、軽く学園の説明や、クラス内での自己紹介などが終わり、舞台はいよいよ数多のトレーナー達がウマ娘の実力や才能を見る選抜レースが行われようとしていた。
最初は、自分が着ていた体操着とはデザインなどが違った事に最初は驚いていたが、向かう先のゲートには、先にゲート入りしているウマ娘が何人か見え、アサマは気が引き締まる思いで、勝負の事で頭を一色に染める。
アサマは、今はメジロの名を名乗ってはいないが、それでもメジロ家の名に恥じない走りをすることを家族や自分自身、トレーナーである彼に誓う。
彼女の直ぐ隣のゲートに、この選抜レースを走るウマ娘達が揃う。
この瞬間、アサマは緊張感などは感じず、不思議と妙な懐かしさを感じた。
感覚的には、つい最近まで現役で走っていたはずなのに、久しぶりに走るような、そんな今まで知らない感覚に戸惑ってしまう。
だが、そんな感覚は直ぐに吹き飛び、本能なのか体の奥底から湧き上がる走りたいという欲望が、体中から溢れてくるのが分かった。
今の彼女の調子は、絶好調と言ってもいい。
そして、そんな彼女に勝てるウマ娘は、このレースにはいなかった。

そんな彼女のこの世界に来て初めてのレースの結果は、堂々の3バ身差の1着で勝利を勝ち取った。
アサマ自身、いい走りが出来たと満足し、尻尾は激しく左右に揺れ、軽やかな足取りでターフコースを後にする。
そんな実力を見せつけたアサマへ、彼ではないトレーナーがまるで磁石に吸い付かれた様に、彼女の元へ押しかけ周りを囲みスカウトし始め、彼等、彼女等が考える理想、夢、思いを各々、言葉に変えていった。
ある者は、彼女の圧倒的な実力が目当てのために。
ある者は、彼女なら自身に莫大な財を齎すと思ったために。
ある者は、その美貌に魅了され、完全なる下心で彼女を自分のモノにしたいと思ったために。
だが、そんなトレーナー達の声はアサマには届かない。
そんな周囲の人達から、気品に満ちたどこぞの令嬢の様に見られていたアサマは、周りを囲っていた人達のスカウトを断り、自分の荷物を置いていたベンチまで移動し、置いてあった自身の荷物をまとめ、座って待つ。
アサマは、来ると分かっている自分だけのトレーナーが迎えに来るのをただ静かに待った。
しかし、彼女の心の内を知らず、どうしても諦めきれない一部のトレーナーが、しつこく彼女を必死に説得する。
だが、あくまでも聞く耳を持たない姿勢でいるアサマに痺れを切らして、その強欲な指先が彼女の体へ伸びる。
あと少しで触れてしまう距離になった時、遠くから自分を呼ぶ声が聞こえた途端、アサマはベンチから立ち上がると、荷物を持ってその声の主の元へ急いだ。
勧誘を断られたトレーナーは、話していた時のツンとした態度から一変した、急な態度の変わり様に驚き、彼女の向かう先に目を向け、そこには、アサマにとっての、この世にただ一人のトレーナーである彼が立っていた。

アサマが、近くへよると、申し訳なさそうにトレーナーが口を開いた。
「すまん。ちょっとトラブって遅れた。」
謝るトレーナーに、アサマは満面の笑顔で答える。
「全然、問題ありませんわ。それにしても、そちらは大丈夫なのですか？」
「……あんまり大丈夫じゃないかもしれない。」
以外にも、何かあると言いたげな言い回しに、若干の不安が脳裏をよぎる。
「一体何があったのですか？」
その問い掛けに、トレーナーは少し目を閉じて、頭の中で伝えるべき言葉を最適化し、声のトーンを一段階下げて話した。
「……もしかすると、俺はお前を担当することが、出来ないかも……しれない。」

トレーナーになるはずである彼の言葉を聞いたアサマは、信じられずに一瞬、彼女の時が止まってしまう。
そして、直ぐに体を震わせ、感情が抑えられず、声のボリュームが上がった状態の声で、言い放った。
「ぜんっっっぜん、大丈夫じゃありませんわッ!?」

その悲鳴のような声は、学園中に響いていると思うほどの音量であったという。

「いったい、何があったらそんな事になるのですか!?ちゃんと説明して下さいまし!!」
急なトレーナーの言葉が理解できずパニックになり、アサマは彼の

首元を掴み、前後に激しく揺らしていた。
「わ、分かったから。ア、アサマ、首元から……手を、離してくれ……は、話せない……。」
「!?し、失礼しました。私としたことが……。少々、冷静ではありませんでしたわ。す、すみません。」
「ゲホッ。まあ、家での話と違ったら、気持ちは分かる。それよりもだな……。」
トレーナーの言葉で、我に返ったアサマは、自分のせいで乱してしまったトレーナーのシャツやネクタイを直し、サッと離れた。
そして、どうしてそんな事になってしまったのかの理由を聞くことが、今の最善の行動とアサマ自身も分かっており、彼に尋ねる。
「ええ。分かっています。では、早速聞いてもよろし……。」
「オイ!そこの君!!」
だが、アサマが聞こうとしていた所に、横やりが入ってしまった。
声の主は、先ほどアサマを熱心に口説き落とそうとしていた、小太りの男性トレーナーであった。
「急に横から、掻っ攫う様な真似をしないでもらいたいね、全く。そこに居る彼女は今、私と話をしていたんだ。妨害行為はやめてくれないかい？」
男は、アサマの自分と彼の態度の違いに腹を立て、今感じていた苛立ちをぶつける様に、両手を広げて自分の正当性を訴え始めた。
そんな男の主張を聞きながらトレーナーは、『この人、知り合いか？』と目線を送ると、アサマは首を何度か横に振る。
「……であるからして、私は彼女と話す権利があるのだよ。ちゃんと順番を守ってくれたまえ。全く、失礼な奴だな君は。」
「……はい？」
男の話を聞き流していたアサマだが、最後の彼への侮辱とも取れる発言に、怒りが湧いてくる。
「では、アサマちゃん、だったかな？これからゆっくりカフェテリアでお茶でもしながら、ゆっくり話でも……。」
「あ、いや。彼女は……。」

男の問いに答えてくれようとした彼にストップをかけ、出来れば話したくなかったが、ここで言い返さなければ彼女の気が収まらなかった。

そしてアサマは、作った笑顔で答える。

「先ほど勧誘の件は、全てお断りした筈です。なので、あなたのお誘いも受けません。それと……。」

気づけば話していく内に、徐々に彼女から笑顔は消え、その代わりに鋭く、冷たい視線がギロッと男へ向けられていた。

「彼の事を何も知らないあなたが、彼を侮辱するような発言をしないでいただけます?。それと、これは個人的な事ですが、気安く私の名前を呼ばないでいただけますか?正直、とても不愉快ですので。では、私達はこれで。」

そう言って彼の手を引いてこの場を離れて行くアサマの姿を、口をポカンと開けてただ黙ったまま男は見ていたが、その様子を見ていたトレーナー達も唖然としていた。

二人の挑戦者　後編

場所　トレセン学園内　中庭

レース後、アサマとトレーナーは、トレセン学園内にある中庭に足を運び、人気のない中庭の端にあった木製のベンチに腰掛け話し始めた。

「それでは、あなた。聞きますが、どうして私を担当出来なくなったのですか？」

「……その前にいいか？」

「？何です？」

アサマは、何を聞かれるのか全然分からずに、首を傾げて不思議そうに聞く。

「昨日、家で話したはずだが、少なくともこのトレセン学園での俺とアサマは、【今年から働く新人トレーナーとメジロ家と全く関係ない普通のウマ娘】でやってくって話だったよな。」

「はい。そうですが。それが何か？」

「……それと、ここでの俺達の関係は、【ただの新人トレーナーとそのトレーナーに偶然スカウトされたウマ娘】て感じだったよな。二人で決めたの覚えてるか？」

「はい。それがどうしたのです？」

話の意図がまったく分かっていないアサマは、困惑してトレーナーの顔を見つめる。

それも、トレーナーが近すぎると感じるほどの距離で。

「……近くないか？こう……距離がさ……もう少し、離れてくれるか？」

気まずそうにしているトレーナーの話を聞いたアサマは、自分の置かれている状況を見てみると、トレーナーの隣へ密着する形で座っている事に気が付いた。

肩や腰、太ももといった体の部分が、互いに密着している状態で、おまけにアサマの尻尾に至っては、彼の腿に乗せられた状態になっている。

その状況は、アサマ自身がトレーナーの直ぐ隣へ腰を下ろし、すり寄ったことで作り出されていた。
その様に座る二人を見れば、ただのトレーナーと生徒の関係ではないと一目で分かってしまうだろう。
そして、ウマ娘の方もどれだけトレーナーに心を許しているのかも、一目瞭然で分かってしまうであろう。
アサマは、自分たちがどうゆう目で見られてしまうのかを容易に想像出来てしまい、無意識にやってしまった自分の行動を思い返し悔いると、トレーナーから直ぐに離れた。
「す、すみません!!私ったら、いつものクセでつい……。」
そして、少し離れて取り座り直すアサマの頬は、赤みを帯びていた。
「……まあ、次から注意してくれればいいんだけどな。じゃあ、話が脱線したけど、話していいか?」
「!!そうですわ。一体何があったのですか?教えて下さい。」
「ああ。それがな……」
トレーナーは、アサマに担当出来ない理由を話し始める。
まず、最大の理由の一つが、新人トレーナーは、学園の上層部の人間に実力を評価され、活動する許可を貰うまでは、個人でウマ娘を担当することが出来ない。
そして、許可を貰うには、その現役で活躍しているウマ娘の担当トレーナーの下で一定の戦績を残した後、その自分を担当していたトレーナーの推薦状を書いて貰い、更に学園での正当な審査を終え、初めて一人前のトレーナーとして活動できる。
何故、この様なシステムを導入しているかと言うと、最前線でウマ娘を指導している他のトレーナーの元で働き、その現場でしか見ることのできない指導能力やウマ娘達との接し方を学び、自身の力として吸収することを目的としている。
全国でもトップクラスのトレーニングセンターであるこの学園は、全国各地から指折りの実力や才能を兼ね揃えたウマ娘達が集まり、そんな国の宝とも言い換えられる彼女達を担当するのが、半端な実力では務まらない。

なので、一人でも実力のあるトレーナーを育成することも兼ねて、この様な決まりが作られた。
だが、下積みとも言えるこの風習は、トレーナー界でも有名な話で、トレセン学園に入った者達の大きな壁と言われている。
その下積み時代に様々な問題が原因で、この学園へ来た新人トレーナー達の1割は、新人トレーナーのまま学園を去ってしまうと言われてる。
そんな、ウマ娘のトレーナーと言う職業は、甘くない世界であるが、問題は更にあった。
それは……。

「その、審査とか色々やると一人で担当できるまで、短くて3年、長くて5年掛かるんだ……。俺の言いたいこと分かるか？」
「つ、つまりは……どう考えても、この1年では、時間が全く足りないと言いたいのですね……。」
「……そうだ。その通りだ。」
「……。」
トレーナーからの説明を聞いた後、アサマは彼の落ち着いている現状に、痺れを切らせ、動き出してしまう。
「……では、一体どうするのですか！これでは、もう詰んでいるではありませんか!?……私、この学園の理事長と話してきます。あまりこうゆうやり方は、好きではありませんが、私の父はこの学園に、多額の寄付をしていましたので、メジロの名を出せば、多少のお願い事も聞いてくれる筈ですわ!!」
そう言うとアサマは、ベンチから立ち上がり、その場から離れようとするも、直ぐに隣に座っていたトレーナーに止められる。
「落ち着けって！ここで、メジロの名を語っても、お前の親父さんの名前を出しても無駄だ。第一、メジロの名なんて出したら、速攻で俺たちの正体、バレちまうだろうが！落ち着けよ！」
「離して下さいまし!!こうでもしなければ、他に方法がありませんわ！」

アサマは、トレーナーの静止を振り切ろうと、掴んできた手を離そうとする。
「いや。まだ、方法はある。大丈夫だ！まずは話を聞いてくれって!!」
「!?あなた。それは、本当ですか！」
「ああ。だから、落ち着いて座ってくれ。本題は、ここからだ。」
そう言うトレーナーの言葉で、落ち着きを取り戻し、ベンチに座り直したアサマへ説明する。
それが……。
「サブトレーナーとして、私を担当するのですか!?」
「そうだ。って言うか、もうそれしか方法が無いんだよなぁ。」
「……確かに、それしか方法はありません。ですが、当てがあるのですか?あなたをサブトレーナーとして雇う人に。」
「まあ、聞いてみなきゃ分からんのよね。こればっかりはな……。あと、その直接、上司になる人も慎重に選ばないといけないんだよなぁ。」
頭の後ろで手を組んで空を見上げるトレーナーに、アサマは不安そうに聞いた。
「……あの、先ほど私達に話しかけてきた人は、出来れば候補から外して頂けると嬉しいのですが。」
「分かってる。ああいうタイプは、最初から候補に入ってないから安心してくれ。」
そう言うと、トレーナーは立ち上がり、大きく伸びをする。
「まあ、そんな訳で、後はその人達が俺をサブで雇ってくれるかだけだな。それこそ、神頼みって所だな。」
「神頼み……ですか。それ以外に方法が無いのなら仕方がないですね。」
アサマも続けて立ち上がろうとすると、トレーナーは手を差し伸べられる事に気が付き、お礼を言って笑顔でその手を取った。
「では、あなた。私は、更衣室で着替えてきますわ。流石に、この体操服のまま帰るわけにはいきませんから。」
そう言うとアサマは、モジモジとさせながら聞き始めた。

「あの……着替えた後……一緒に帰れたりしますか？」
「いや、俺は、まだやる事あるから帰るわけにはいかないけど……。」
「そ、そうですよね。まだ、お仕事がありますものね……。」
　一緒に帰れないことが分かると、ウマ耳はシュンと前に倒れ、ついさっきまで力強く左右に揺れていた尻尾は、力なく動かなくなってしまった。
　とても残念そうにしているアサマを見て、トレーナーは落ち込んでいる彼女の機嫌を直してもらうため提案する。
「そうだ。丁度いいから自販機で飲み物でも買ってくるよ。喉渇いてるだろ。帰る時、またここに来てくれ。」
「……あなた。はい！では、直ぐに着替えてきますので、少しの間お待ちになって下さいまし！」
「ちょっと待った！」
　そう言いったアサマは、目的の更衣室へ急いで向かおうとするが、トレーナーに呼び止められてしまった。
「少なくとも、ここでは俺の事を【あなた】って呼ぶのやめてくれ。ちゃんとそれ以外に呼ぶ名前があるんだから、そっちで呼んでくれよ。俺が決めた訳じゃないが、【あなた】なんて呼び方だと周囲の奴等に、余計な誤解を生むからな。」
　トレーナーの話を聞いたアサマは振り返ると、まるで悪戯好きの子供の様な笑顔で、トレーナーの仮の名前を呼んだ。
「これは、失礼しましたわ。私だけの、担当トレーナーの、青島さん♪」
　アサマはそう言うと、手に持っていた荷物を抱きしめる様に持ちながら、更衣室へと足早に向かって行った。
　その様子を見ていたトレーナーは、ため息交じりに思う。
（アサマの奴。今、完璧俺の事、揶揄ってたよな……。）
　だが、不思議と嫌な気持ちにはならずに、逆に笑みさえ浮かんでしまう。
（それじゃ、自販機へ行くか。アサマが戻って来るまでに買っておかないとなぁ……。）
　そうして、トレーナーは自販機へ向かった。

数分後　トレセン学園　自動販売機前

自販機にたどり着いて、上着の内ポケットから財布を取り出し、小銭を入れて何を買うかと悩もうとした時、思いついた。

……あ、そうだ。

アサマに何飲みたいか聞くの忘れてた。

まあ、ここはレース後の事も考慮して、スポーツドリンク系でいいだろ。

流石に、おしるこじゃないだろ。

何を買うかで悩んでいると、後ろから声が聞こえてきた。

「ゴ……ップさｎ……の人……」

「お！……ｋんじの……ｋん……」

「な…ダｓ……。ｈ……ｎか？」

「せ……ｇた。ほんｔ……やｒ……ｄか……」

小さい声で話しているのか、話の内容は分からなかったが、たぶん、この自販機で飲み物買おうとしている生徒だろうか。

聞こえてきた声の主達の足音が、後ろから近づいて来てるのが分かる。

あんまり、後ろを待たせるのも悪いし、さっさと買って戻るか。

自分用に水、アサマにはスポーツドリンクの計２本を買って、約束した場所へ戻ろうと後ろを向いた。

「!?」

その瞬間、後ろへ並んでいた人達が、余りにも異質な存在で、そのため彼女達を見て驚いてしまった。

俺の後ろへ並んでいた４人は、全員マスクに黒いサングラスを身に着け、如何にも怪しい雰囲気を放っている。

そして、俺はこの怪しげなウマ娘達を知っていた。
そう、面識は無いはずなのに、それはもうよく知っている。
何故なら、この世界に来る前のさらに前のウマ娘がゲームやアニメであった世界で、彼女達を見たことがあるからだ。
あの頃は、実際に会ったらなんて夢みたいな事を考えてた事もあった。
だが、現在の俺の考えは会いたいから、今一番関わりたくないウマ娘達へと全く変わっていた。
いや、正確には彼女達ではなく、その中にいるとあるウマ娘に関わりたくなかった。
俺が最も警戒しているウマ娘枠にそいつは入っているからだ。
アサマにも、接触する際は気を付けるよう言ってたが、その注意した俺が出会ってしまうとは……。
しかし、分からない……。
何故、彼女達がここにいるんだ。
今起こっている事に動揺して固まっていると、その最も警戒しているリーダー格であろう銀髪ロングのウマ娘がこっちを指差しながら、3人へ指令を出した。

「スカーレット、ウォッカ、スペ！やっておしま～い！」
「はい。〝ゴールドシップ〟さん。」

「お、おい!?いきなり何すｒ……前が見えな……うわぁぁぁぁ……」

そして、麻布を被せられたトレーナーの視界は真っ黒に染まった。

ライスシャワーは臆病である

トレーナーが拉致されてから、数分後

「……遅いですわね。あの人……。」

アサマは、スクールバックから携帯を取り出すと、時刻を確認する。

同時に、彼から連絡があるか見てみるが、ホーム画面に通知はなく、心の奥底で何かざわつく感覚に陥る。

それは、トレーナーの身に何かあったのではないかと言う考えによって生み出されていた。

だが、彼が飲み物を買って何処かより道をしている可能性もあるが、何も連絡が無く、こちらから送っても返信が帰ってこない。

出来るだけ連絡は早めに返すと言っていたトレーナーが、連絡に気付かないのも不自然に思う。

このトレーナーと別れた場所から自販機までの距離を考えると、明らかに時間がかかり過ぎている現状にアサマの中にある不安が、更に大きく膨れ上がる。

そして、アサマは一つの考えにたどり着いた。

「まさか……誘拐!!??いや、でも……こんな白昼堂々と、このトレセン学園で……」

アサマは、一人立ち尽くし考える。

(兎に角、今は情報が少なすぎます……。何か……!!)

そして、ふとあることに気が付いた。

それは、ここから少し離れた場所にある、切り株に座った制服姿のウマ娘に。

もしかしたら、自分がいない時に、何があったのか見ていたかもしれない。

アサマは、その座っているウマ娘に向かうのだった。

ライスシャワーは、切り株に座り俯いていた。
「はぁ……。」
前を向くことが出来ず、ぺたんと元気なく耳は垂れ、足元に視線を下げてしまう。
「やっぱり、ライスは……もう、走らない方がいいのかな……。」
ライスの眼から、自分の意思とは関係なしに、涙があふれ出す。
必死に堪えようとしても、思った様に止まらず、自分が出来ることは涙が頬を伝わないようにする為、下を向くことしか出来ない。
そんな、気づけばいつも現れては自分の言うことを聞かない厄介者は、彼女の感情が抑えられずに溢れてきたモノであり、今の自分と同じぐらいキライであった。
「みんなを不幸にするぐらいなら……ライスは……ライスは……。」

「あの、少しよろしいかしら?」
「わあぁぁ!!」
突然声を掛けられ、ライスシャワーは声に出して驚いてしまう。
そして、無意識に自分が何かしてしまったのではないかと思い、相手の顔を見る前に言葉が先に出てしまった。
「ご、ごめんなさい。ら、ライス、何かしちゃったなら、謝るから。だから……。」
「落ち着いて下さい。別に私は、貴女に謝って欲しいのではなく、お尋ねしたいことがあるだけですわ。ですから、顔を上げて下さい。」
聞いたことのない声の主に言われた通りに顔を上げると、そこには見慣れないウマ娘の姿があった。
明らかに名前も知らない初対面の相手のはずなのに、初めて会った感じがしない、不思議な感覚をライスは覚える。
そして、その感覚はライスの口から言葉となって発せられた。
「……綺麗。」
「……はい?」
予想もしていなかった急な言葉にアサマは聞き間違いかと思い、戸

惑ってしまう。
　そして、アサマの反応を見て、ライスは自分が言ってしまった言葉を思い出し、顔を赤くさせ頭を下げた。
「きゅ、急にごめんなさい！その、綺麗な人だったから……。ライスなんかが言っても、失礼だよね。」
　シュンと俯いてしまったライスに、アサマは笑顔で答える。
「いえ。そんなことありません。お褒めの言葉感謝しますわ。それと、これを……。」
　そう言って、アサマはバックからハンカチを取り出すと、ライスへ手渡した。
「あ、あの……。」
　動揺しながらも受け取ったライスだが、そのハンカチで涙を拭うと彼女のものを汚してしまう。そのことへの忌避感から、ライスは固まってしまった。
　そんな彼女を見て、アサマが続ける。
「乙女がそう簡単に人前で涙を見せてはいけませんわ。それは、もっと然るべき時に大切な相手へと見せるものです。ですから、使ってくださいな。」
「は、はい！あ、あ、ありがとう……ございます……。」
　ライスは、渡されたハンカチで、目元を軽く拭った。
「では……。いえ。まずは、自己紹介からしましょう。私は、アサマと申します。貴女の、お名前を伺っても？」
「わ、わたしは、ライスシャワー……ッです。」
「ええ。ではライスさん。ではまず、こちらが聞く前に、どうして泣いていらっしゃったか、聞いてもよろしいですか？」
　アサマの問いにライスは、直ぐには答えられず黙ってしまう。
「もしや、誰かにいじわるをされたとかですか？」
「ち、違うの。ラ、ライスはただ……。」
　ライスシャワーは、話した。
　自分が、レースで勝っても、誰も笑顔にならない。
　自分が1着をとっても聞こえてくるのは歓声ではなく、罵声や笑顔

とはかけ離れた妬ましそうにこちらを見る観客の姿。
走る自分の姿見て希望を与えたいのに、そんな風に疎まれてしまった自分への嫌気。
そんな邪魔者と言える自分が、このままレースに出続けてもいいのかと。
ライスは、そんな悩みを今初めて会ったアサマに打ち明けた。
「ラ、ライス。ライスが走るとみんなを不幸にしちゃうから。だから、もうライスは走らない方がいいのかなって……。」
「……事情は、大体分かりました。では、一つだけ言わせて貰います。」
「いい加減にしなさい!!」
「は、はひぃ!!」
急なアサマの声に驚き、背筋は伸び、変な声が出てしまう。
アサマは、そんなライスへお構いなしに続けた。
「さっきから聞いていればなんですかそれは。勝たなければ良かった？いいですか、ライスさん。貴女が今しているそれは、敗れていった子たちへの侮辱とも言える行為ですわ。」
「べ、別にライスはそんなつもりじゃ……。」
「レースとは、真剣勝負の舞台。勝者がいれば、敗者もいます。勝つか負けるかのシンプルで厳しい世界です。それが、勝った者の態度ですか！勝者なら、もっとドンと胸を張るものです。」
「じゃあ、どうすればいいの。どうすれば、ライスは……皆に……。」
「そんなの簡単です。敗れたウマ娘達が誇れるほどのウマ娘になればいいのです。」
「誇れるウマ娘……。」
「そうです。私は、あのライスシャワーに負けたのだと。言わせる位にです。そうすれば、周囲の反応も変わる事でしょう。」
そんな存在に、自分などがなることが出来るのか不安になり、ライスはまた視線を落としてしまう。
「ラ、ライス、なれるかな。そんな凄いウマ娘に……。」
「なれる、なれないのではなく、なるのです！貴女だけの、誇り高いウ

マ娘に。それが、貴女に敗れていった子達への礼儀ですわ。」
正直、ライスは考えもしなかった。
自分が変わると言う選択肢に。
そして、その闇の中に現れた一筋の希望は、彼女を明るく照らし出した。
「ラ、ライス頑張ってみるね。あ、ありがとう。アサマさん。」
「いえ。私も、すみません。偉そうなことを言えた身ではないのですが……。助けになれたなら幸いです。」
アサマは、思い出したかの様に、ライスに聞きたかった事を話す。
「本題ですが、その、少し前にあそこのベンチに座っていた男性を知りませんか？私のトレーナーさんなのですが、飲み物を買いに行ってから戻らないのです。」
ライスは、記憶を遡らせると、衝撃的な光景だった為に、直ぐに心当たりが見つかった。
「あ、それなら、ライス分かるよ！さっき、ゴールドシップさんとか、スピカの人達が、人を担いで行ってたから、多分だけどその人がアサマさんの探してる人だと思うよ。スピカさんの小屋があるあっちの方へ向かって行ったよ。」
人差し指をスピカの小屋の方へ向け、アサマに教える。
ライスの話、ゴールドシップと言うウマ娘の名前を聞いた瞬間、アサマのウマ耳がピクンと跳ねる。
「ゴールドシップ……。そう、あの方ですか……。」
そして、アサマの表情が静かに曇っていった……。

誇り高いウマ娘。
まだ、何をしていいか分からないけど。
心構えからなら、今すぐできるよね。
いつか、見てくれる人々に希望を与えられるウマ娘に。

でも、アサマさんって不思議な人。
初めて会った筈なのにそんな気がしなくて、何故かマックイーンさんを思い出しちゃった。
雰囲気が似てたりするのかな……。
名前にメジロって付いて無かったから、メジロ家の人じゃないし、きっと偶然だよね。
……よし！
ライス、決めた！
「アサマさん。ライスもう泣かな……ひいぃッ」
驚きの余り、変な声が出てしまった。
何故なら、今目の前にいるアサマさんからさっきまでの優しい感じがなくなって、近くにいるだけで冷たく凍えてしまうほどに変わっていたからだ。
「……フフッ。久しぶりです。ここまで、真正面からケンカを売ってくるとは……。いいでしょう、受けて立ちますわ。」
その言葉は私に向けられたものではないと分かっているけど、もし自分に対して言われていたらと思うと足が竦んだ。
そして、何よりあの笑顔。
目は一切笑っていなかった。
「教えて下さってありがとうございます。では、これで失礼します。」
もう泣かないと誓ったライスシャワーだったが、さっきまでとは明らかに違ったどす黒いオーラを纏い静かに怒っているアサマの姿を見て、その誓いも虚しく目から涙が溢れていた。
「助けて、お姉さま……。」

トレセン学園の黄金船

ゴールドシップは、部室に運んできたトレーナーをパイプ椅子に座らせると、意気揚々に頭に被せていた麻布を取る。
突如として暗闇から解放され、蛍光灯の眩しさで目を細める。
「ここは……。」
段々と目が慣れてくると、自身の目の前には、自分を攫った犯人であるウマ娘達が佇んでいた。
室内には、彼女たちとトレーナーしか見当たらない。
そして４人のウマ娘達は、互いに向かい合い、ヒソヒソ声で話し始めた。
「(あの……ゴールドシップさん。今更何ですけど……大丈夫ですよね。こんなことしても。私、何も聞いて無いんですけど……)」
「(まぁ、何とかなんだろ。こいつがどんな奴なのか知らんけど。)」
「(ええ!?ちょっと待って下さい。ゴールドシップ先輩!!知り合いじゃないんですか!?私は、てっきり……。)」
「(オレも、スカーレットと同じで、知ってる奴だと思ってた。)」
「(あんな奴、アタシは知らん。)」
「「(えぇぇ……。)」」
ゴールドシップの答えに、３人は絶句する。
驚きながらも、今のゴールドシップの言葉に疑問を持ち、スペシャルウィークが聞いた。
「(じゃあ、何であの人を、選んだんですか？)」
「(……理由か。いや、なんかアレだな。気分的な……アレ？)」
「「(えぇぇ……。)」」
思っていた以上にひどい理由に再び３人は絶句する。
「(じゃあなんだけどさ、コレ結構まずいんじゃないか？オレ達、無関係の人を、ただ拉致しただけなんじゃ……。)」
「(そうでもないわよウオッカ。フリーのトレーナーならまだ可能性はあるわ。)」

「(そうですね。ただでさえ、うちに入ってくれるウマ娘はおろか、トレーナーさんなんていませんからね。)」
「(そうそう。スペ先輩の言う通りね。多分だけど、もう新人のトレーナー達には、私たちの事は知られているに違いなし……。)」
「(……ああ。だからみんな、オレ達って言うか、ゴールドシップさんを見た途端、蜘蛛の子を散らすように……。)」
「(……よし!今決めた!この際だ!コイツにしようぜ!アタシ達のトレーナー!)」
「「「えええ!?」」」
3人を他所に、「よし!」と意気込んでゴールドシップは、様子を伺って座っているトレーナーの前へ向かった。
「……と言う訳で今日からアンタは、このゴルシちゃんが所属する、チームスピカのトレーナーになるってわけだ!良かったなぁ!この幸せ者め!」
「……どうしてなる前提なんだよ。言っとくがその誘いの話は無理だ」
ゴールドシップの提案を断る。
すると、断られた事が信じられないのか数歩後ずさりし、たじろいでしまう。
「え?う、嘘だろ!断るのか!?この、超絶美女のゴールドシップ様が所属するスピカのトレーナーになれるんだぞ!いったい何が不満なんだよ?あ、もしかしてアレか!年に一度の旅行の事心配してんのか?それなら大丈夫だ。ちゃんと行き先は月で月面旅行だからな!」
「本当に何を言ってるんだ……」
「……あの。」
ゴールドシップとのやり取りを見ていた3人が、申し訳なさそうに話ってきては、並んで一斉に頭を下げ始めた。
流石に予想出来ていなかったのか、驚きの余り目を見開いてしまう。
「私からもお願いします!少しの間でいいですから!」
「頼むよ!オレ達にはもうアンタしかいないんだ!」

「無理なのは承知してます。でも……お願いします！そうしないと、チームスピカが……」
ゴールドシップは兎も角、それ以外のスペシャルウィーク、ウオッカ、ダイワスカーレットらの行動にトレーナーは動揺を隠せずにいた。
「……何故、そこまでして固執する？それに、スピカにはもう沖野トレーナーがいるだろ」
そんな、トレーナーの言葉にスペシャルウィークが表情を曇らせながら答える。
「トレーナーさんは……今はいません」
スペシャルウィークの思いもよらぬ発言に、目を見開く。
学園の関係者からそんな話は聞いていなかったし、当然チームスピカには沖野トレーナーがいるものだと思っていた為に、彼女の言葉を直ぐには信じられなかった。
「まさか。そんな訳が……」
「ですから、お願いします！他のトレーナーさん達はまともに取り合ってもくれないんです」
「……分かった」
「!?ほ、本当ですか！そしたら……」
「いや、まず今このチームに何が起こっているのか聞かせて欲しい。聞いてからこっちも考える」
「はい。実は……」

「――そういう訳なんです」
スペシャルウィークから話されたチームスピカの現状を聞くと、トレーナーの中で最初から決まっていた答えに迷いが出てきてしまう。
「……そっちの事情は分かった。取り合えず、沖野トレーナーに少し聞きたいことがあるから、少し待っていてくれ」
そう言い残し、トレーナーはスマホを片手に部室の外へ出て行った。

トレーナーの様子を見守っていた４人は、ひとまず話を前向きに聞いてくれる姿勢にほっとしていた。
だが、そんな中でもウオッカは、表情を沈ませたままだった。
「……スペ先輩。オレ達これからどうなってしまうんでしょうか？このままだと、スピカが解散なんて話にも……」
「大丈夫です！きっと、あのトレーナーさんなら、事情を分かって誘いを受けてくれます！」
「そ、そうですよね！全く、どうしてこんなややこしい事に……。いいこと思いつきました！事態が落ち着いたら事の元凶にスイーツバイキングでも奢って貰いましょう！スペ先輩!!」
３人はお互いに励ますと、徐々に明るさを取り戻していった。
「ま、安心しろお前ら。そん時は、アタシが一肌脱いでやるよ。最悪、抜群のスタイルを持つ、このスーパー美少女のゴルシちゃん直々にパイルドライバーを……」

「それは、随分興味深いお話ですわ」
スピカの面々は、聞き慣れない声がした入口の方を振り返ると、そこには彼女達が誰一人見覚えのないウマ娘が立っていた。
そして、不思議な事にそのウマ娘を見た途端、彼女達はある人物を思い出した。
身長、髪質、スタイルなどで明らかに別人だと分かっていても、何故か一瞬そうではないかと思ってしまった。
「……マックイーン」
その名前が自然とゴールドシップの口から零れてしまう。
「いや、違う。誰だお前」
直ぐに別人だと気づき、目の前のウマ娘に４人の意識は自然と集ま

る。
だが、そんな事を気にする素振りを見せず、カツカツ鳴らしながら歩く音が部屋中に響く中、他のスピカのウマ娘達には目もくれず、ゴールドシップの目の前にまで迫る。
「あの……あなたは……ヒィッ」
向かう途中でスペシャルウィークが声をかけると、目を合わせただけで背筋が凍りそうな程の睨みが1人に留まらず、後ろで見ていた2人にまで届いてしまった。
そして、恐怖の余りウオッカとスカーレットは、身を震わせながらスペシャルウィークを盾にする。
「なあ。スペ先輩。誰だよ、あの人。尋常じゃないほど怒ってるぞ。何やったんだよ。スカーレット」
「なんで、私がやらかした前提なのよ！知らないわよ！スペ先輩は知って……？す、スペ先輩!?」
「……」
「き、気絶してる……」
スペシャルウィークは、人生で一度も経験したことがない程の睨みを真っ向から喰らい、立ったまま気を失ってしまった。
そんな姿を横目に見ながら、スペシャルウィークの身を案じている二人に言った。
「一応、あなた達も共犯者ということをお忘れなく。後でたっぷりお話を聞かせて貰いますので」
話を聞いた二人の顔が青ざめた事に見向きもせず、再びゴールドシップの方へ歩き始めた。
そして、目の前に迫ると、観察する様にジッと頭から足の先まで、まるで何か値踏みをするかの様に細目でじっくりと見る。
「!?」
見られている間、ゴールドシップにも同様に、今まで感じたことのない恐怖からか腕には鳥肌が立っていた。
そんな異常な状況でも、自身に平常心を保つように心の中で言い聞かせ、何とか冷静さを欠かずにいつも通りに接しようとする。

観察が終わると、今度はゴールドシップに目線を合わせ、にこやかに微笑んだ。
だが、そんな彼女だが、笑顔の裏でゴールドシップを見た時から感じていた疑問を気にしていた。
それは……。
「……一つ聞いてもよろしいかしら」
「な、なんだよ」
「貴女……メジロ家のご息女だったりします？」
彼女は、本能的に何故かそう感じ取った。
「いや、全然違うけど。いきなり何だ？急に。マックイーンなら兎も角」
「……そうですか。どうやら私の勘違いだったようですわ。お気になさらず」
そう言うと、今から全力でお話する相手がメジロ家に関係ないウマ娘ということに安堵し、再びにこやかに微笑む。
「……では貴女が、ゴールドシップさんですね。噂通りの独特なお考えをお持ちだとか」
「へ、へえー、おまえ。アタシを知ってんのか？まぁ、当然か」
「ええ。存じております。人の担当を誘拐とも言える強引な方法で、自分たちの部室に連れてくる尖った方だと」
「人の担当？……あーわりぃ。アイツはこのチームスピカのトレーナーになってもらうんだわ。だから、もうアタシらのトレーナーなんだよなー」
「冗談がお好きなのですね。生憎貴女に構っているほど、私達は暇ではないのです。なので、彼をここに連れてきて下さいます？そうすれば、今回の事は水に流して……」
「わりいな。こっちも引けない理由があるから無理なもんは無理なんだ。トレーナー……いや、うちの『とれぴっぴ♡』はもうチームスピカのモノになったから……!?」
話しの途中で、特に『とれぴっぴ♡』と言った途端、ゴールドシップは自身を襲ってきた違和感に気付く。

レースなどでもかかない手汗、寒いわけでもないのに全身が震え、この一帯の重力が倍になったと思うほどのプレッシャー。
だが、その中でも一番ヤバイと思わせていたのが。
「……表（ターフ）へ出なさい。格の違いと言うものを見せてあげます」
目の前にいるウマ娘から今までとは違う、低い低音の声と共に放たれた本物の『殺気』だった。
（コイツ、マジでヤベェ。こ、殺される……）
「あ、ごめんな……イヤ、あ、あ、ああ……」
ゴールドシップは、生まれて初めて死への恐怖を感じ、全身をブルブル震わせ、耳は力なく倒れ、目から大粒の涙が零れた。

アサマはやはり身内に甘い

【前日　夜】

「……スピカのメンバーもそうだが、一番警戒するのが、『ゴールドシップ』って奴だ。俺もだが、お前も余り近づくな」

反対側に座る彼からゴールドシップへの名前を聞いた途端、私はつまらなそうにそっぽを向きます。

「……随分、そのゴールドシップさん？という方を、気にかけているんですね」

頭では分かっているのに、どうしてもイジワルな聞き方をしてしまう。

「いや、だから……。ってか、何で機嫌悪くなってんだよ」

「いえ。別にそんなことはないです。ただ、先ほどからそのゴールドシップさんの話ばっかりしていらっしゃる様ですが……。そんなに警戒する必要があるんですか？」

「お前はまるで分かってない。アイツのヤバさが。思考がぶっ飛んでるから、アイツならもしかすると、俺達の正体を……」

確かに話を聞くと、注意しなければいけないウマ娘だと私も思います。

だとしても……。

「まあ、アナタの考えは分かりましたが、しかし……」

「……なんだ？」

「……いえ。別に何もないです。明日は早いのでこれで失礼します。おやすみなさい。」

立ち上がりそう言い残して、話していたリビングを後にする。

自室に着いて直ぐにベットに横になり、意識が落ちるまで彼との会話が頭の中に蘇る。

……何度も、何度も、その見知らぬウマ娘の名前を私に言います。

（……気に入らない）

彼が、そういう意味で気に入っている訳ではないと分かっていても、そのウマ娘を特別に扱っていると思うと、何故か心の奥底でモヤモヤとした何かが湧いて出てきました。
ゴールドシップ。
彼にそこまで思わせる彼女が、どの様なウマ娘なのか一度じっくりと話してみたいものです。
こちらに干渉しないのであればそれまで、ですが……。
もし……。
あちら側から距離を詰めてきた時には、容赦はしません。
あの人の特別枠は、私だけで十分なのですから……。
ざわつく心を鎮めるように、静かに目を閉じて眠りにつきました。

【スピカ部室周辺】

「はい。では、先ほど話した通りに……はい、こちらこそよろしくお願いします。では、失礼します」
電話を切ると、自然と安堵の溜息が出る。
これは、思わぬ収穫だ。
こちらが出した条件を全て飲んだ上で、週に2日間休みまで貰えるなんて。
下積みという形で、奴隷の様に酷使されると思っていたが、その心配はしなくても大丈夫そうだ。
だけど、スピカの面々がやけに焦って表情が硬いと思ったら、まさか沖野Tが過労で入院しているとは思いもしなかった。
電話越しに話しただけだが、ホントに話せばわかる人って感じでいい人そうだった。
後でこのことをアサマにも教えてやらないと。
俺は、代理のトレーナーをやるのかをスピカの面々に伝える為、彼女達が待つ部室へ向かった。

（……一体これはどういう状況だ……。）

スピカの部室に帰ってきたトレーナーが目にしたのは、軽い地獄であった。

立ったまま気を失っている者、それを盾にするかのように怯えた様子で後ろに隠れる者、いつも破天荒なイメージで、弱っている姿が想像できない様な奴が、力なく座り込み泣き出している。

そんな修羅場の中心に、見覚えがある後ろ姿があった。

禍々しいオーラを纏い、正に世界の終焉を望む魔王の様に立ち尽くす彼女が、誰なのか直ぐに分かった。

「お前、何やってんだよ？」

「……!!」

トレーナーの声で、絞られていた耳はピンと真上に向き反応すると、振り向きトレーナーの顔を見た途端、彼女から放たれていた凍えそうな圧が一瞬で消え去った。

「あな……。と、トレーナーさん！無事ですか！心配したんですよ！」

ひと睨みで相手を縮み上がらせそうな表情が、今は瞳を輝かせ柔らかく微笑む姿に変わり、自身の手でトレーナーの頬に触れられる程の距離までトレーナーへ駆け寄り、両手を握った。

「心配？……ああ、そういえば、連絡するの忘れてた」

「私、連れ去られたと聞いて心配で居ても立っても居られなくなって……」

アサマから想像すれば、麻布顔に被せられて連れて行かれたと聞けば、ただ事ではないと思うのが普通である。

「……殴られた跡等も見当たりませんし、元気そうで何よりです」

トレーナーの頬に触れ、大丈夫そうなトレーナーの姿を見て、アサマは胸をなでおろし安堵した。

優しく頬に手を添えられ、視線を右へ左へ動かされながら、アサマ

に部屋の現状について聞いた。
「お前、アイツらに一体何したんだよ」
「……特には何もしていません。ただ、少しお話し合いをしただけですが？」
アサマは聞かれた途端、ばつが悪そうに視線を逸らした。
「それ、話し合いじゃなくて一方的な脅しじゃ……」
「……そんな事より、まず私に言うことがあるのではないのですか？」
「え？」
アサマは、ジト目でトレーナーに視線を送り聞く。
「……ああ、よくわかったな」
聞くタイミングが悪くトレーナーは、アサマがスピカのサブトレーナーの件を知っていると思ってしまった。
「分かるも何も、トレーナーとして、尚更人として当然なのではないかと」
当然、アサマ自身サブトレーナーの事などは知らず、彼女の求めていた言葉はもっと別であった。
都合よく進む話に若干の違和感を覚えながらも、トレーナーが言おうとする言葉にアサマの耳や尻尾が自然と動いてしまう。
「そうだな。話が早くて助かる。今後俺は、チームスピカのサブトレーナーになる。もう、スピカのトレーナーには話を付けてある」
「……はい？」
トレーナーの言葉に目をぱちくりさせると、直ぐにピコピコと動いていた耳は後ろに絞られ、上下に揺れていた尻尾は一瞬で止まり、同時にアサマの怒号が部室に響いた。
「……全ッ然違いますわ！まず、『心配かけてすまなかった』ぐらい言ったらどうなんですか!!私、トレーナーさんに何かあったと心配で心配で……って」
話しながら少し冷静になってトレーナーに言われた事を思い出し、急な予定変更に言いたかった事は引っ込んで消え去った。
「……今の話、本気なんですか？」
「ああ、本気だ」

「……はあ。昨日の話と大分違いますが……よろしいんです？」
「ああ、大丈夫だ。問題ない」
「……分かりました。トレーナーさんが問題ないと言うなら従います」
多く語らないトレーナーに、アサマは渋々納得する。
本来、チームスピカには近づかないと決めていたのに、それがサブトレーナーになると言い出すからには、それなりの理由があるのだとアサマは思った。
「世話をかけるな。他にも色々と話したいことがあるが、それよりも……」
（この部室の現状を何とかしなければ……）
部室の散々な状況を見てトレーナーはそう思った。
「アサマ。ホントに話しただけか？流石にこうはならないだろ」
「まあ。捕まったと聞いていたので警戒して少々威嚇を……」
「お前なあ……」
今後のスピカの面々と上手く良好な関係を気付いて行けるのかと思うと、トレーナーの口から深いため息が出る。
さて、これからどうするか考えていると、背中に軽くぶつかった様な衝撃が襲った。
何事かと思い後ろを見ると、必死に涙を堪えて体をブルブルと震わせているゴールドシップが、背中から顔を覗かせていた。
「お、おい！オマエの知り合いか！コイツいきなり部室に入ってきやがって……なんなんだよぉ！」
背中を掴み隠れながらゴールドシップは、弱々しくアサマに言い放つ。
「おい、引っ付くな。しかし、この怯え方普通じゃないぞ。俺がいない間にどんな話をして……!?」
トレーナーが話すのを途中でやめてしまう程、目の前のアサマに変

化があった。
その変化とは、いつも大体彼女がお怒りの時に出てくる独特の空気感。
トレーナーから見ると、彼女の周りにどす黒いオーラを纏っている様に錯覚するほどだった。
そんな、アサマが口を開くと出てきたのは怒号ではなく、乾いた笑い声であった。
「……フフフ。全く。よくもまあ、そんな被害者面が出来るものですね。私のトレーナーを一方的に攫うような蛮行をしておきながら、挙句の果てに、『私を守って下さい♡』とでも言わんばかりに、彼の背中にくっ付いて隠れる。ここまでされたら、もはや清々しいと感じてしまいますわ。ですが……」
まるで猛禽類の様な鋭い眼光が、ゴールドシップを再び襲った。
「彼は私のトレーナーさんです。今すぐ彼から離れなさい。さもなければ、こちらも容赦しません」
「ひ、ひぃ」
「アサマ、落ち着いてくれ。話が進まないだろ。あと、ゴールドシップ。お前もいい加減背中から離れろ！」
アサマへの恐怖からか、無理やり引きはがそうとするトレーナーを、後ろから抱きしめる様にホールドし、自分を守る盾にする。
その様子を見て、アサマの手がゆっくりとトレーナーへ伸びる。
（だ、ダメだ。どういった訳かアサマの奴、キレて声が届いていない……）
これ以上のトラブルはさすがに不味い。
このままだと、これが問題となり、チームスピカに入る話もない事にされるかもしれない。
何かしらのきっかけがあれば……。

「これは、一体なんの騒ぎですか!!」
開きっぱなしの入り口から聞こえた声には聞き覚えがあった。

紫がかった芦毛のロングヘアー、右耳には緑のリボンが付けられ、気品に満ちた雰囲気、何処か自身の愛バと重ねてしまう存在は、まさしくメジロの名を受け継いだ彼女であった。
「マックイーン、何かあったの……って!?ナニ!この状況!?」
その後ろには、トウカイテイオーが驚いた様子で部屋の中を覗いていた。
「ゴールドシップ!あなた、また何かしでかして……」
この部室の現状を見て、ゴールドシップが原因と思い問い詰める。
すると、耳をぺたんと折り曲げ、震える声で、アサマへ指先を向けながら話し出した。
「ゴ、ゴルシちゃんは何もしてないぞ!やったのは、こ、コイツだ!」
ゴールドシップに言われ、その彼女が言う犯人の顔を見ると、驚きで目を見開いてしまった。
マックイーンは、直ぐに彼女の事を思い出すのが容易であった。
忘れもしない、喫茶店で店の都合で相席になり、そこで一緒になったウマ娘である。
自身の目の前で繰り広げられる、ドラマや恋愛漫画の様な2人の姿を見て、恥ずかしさが原因なのか胸の内がむず痒くなる感覚に襲われたほどだ。
そんな店で会った彼女が目の前にいた。
「あなたはもしや……アサマさ……!?」
本人である確認の為に、店で教えてもらった名前を口にした途端、アサマがマックイーンの元へ向かって歩く。
目の前にいたトレーナーとゴールドシップを素通りして、真っ直ぐにマックイーンへ近づくと。
マックイーンを思いっきり抱きしめた。
「また、会えましたね。私の……」
「……可愛い。可愛い。子ぎつねちゃん!!」
そう言ってマックイーンを抱きながら、愛おしそうに頬擦りをし始

めたのだった。

いつ孫が一人だと言いましたか……ですって？

『……んっ。ここは……』

ふと目を覚ますと、部屋で寝ていたはずが、そこは不思議な空間でした。

辺り一面緑の草花が広がり、雪解け水の様な透き通った水が流れる小川、花の蜜を吸うためひらひらと漂う無数の蝶、心地よいそよ風が頬を撫で、頭上に広がるどこまでも青色の空。

今、死後の世界があると言われてしまったら、ここだと信じてしまう程に美しい景色。

自分以外の人の姿は無く、人工物すら見当たらない。

まるで自分だけがこの世界に居るよう。

都会では決して見られない絶景がそこにはありました。

そんな、突然この様な状況に、慌ててしまってもおかしくないのですが、私は不思議と不安は感じませんでした。

何故なら、きっとここが私の夢の中だと直ぐにわかっていたからです。

でなければ、つい先ほどまで自室のベットで寝ていたはずなので、この事態の説明の仕様がありません。

それにしても、夢にしては現実的過ぎます。

試しに足元の花を指先で摘まむと、ツルツルとした葉っぱの質感が伝わってきました。

前に話で聞いたＶＲ？……と呼ばれる機械でも、再現できるのでしょうか。

使ったことが無いので分かりませんが。

ですが、ここが現実だと思ってしまっても不思議ではないですね。

それにしても。

こんな夢を見るなんて、恐ろしい夢よりはいいのですが、現実で疲れが溜まっているせいでこのような夢を見ているのではないかと思うと、少しだけ私自身が心配になります。

今週の何処か時間が空いた時に、気分転換であの人とどこか行ってみるのもいいかもしれません。
そんなことを考えながら花々を眺めていると、突然声が聞こえてきました。
『おばあ様!!』
『!?』
何故か、自分が呼ばれていると思い声がした方を向くと、そこには1人の幼いウマ娘が立っていました。
正直、私自身立ち尽くす彼女に見覚えはありません。
すると、彼女は両手を広げて一直線に笑顔でこちらへと走ってきました。
私には、彼女への警戒心は全くなく、それどころかどういう訳でしょうか、こちらに向かってくる彼女を、優しく抱きしめたいという欲求に駆られます。
膝で立ち、向かってくる彼女にこちらも両手を広げて答えると、彼女は勢いよく私の胸の中に飛び込んできました。
頭をスリスリしながら、ぎゅっと抱きしめ、そんなに嬉しいのか尻尾はブンブンと左右に振られていました。
その様子は、さながら親の帰りを待つ子供が仕事を終えて会えって来た母親に甘えるよう。
『えへへ……』
その姿を見てしまうと、何故か自然と頬が緩んでしまう。
『貴女は、何処から来たんです?』
頭を撫でながら彼女を見ていると、ある事に気が付きました。
紫がかった芦毛のロングヘアー、右耳には緑のリボン、おまけに私の事を『おばあ様』と。
それだけの事が分かれば、大体察しが付きました。
現実なら、決してあり得ない話ですがここは、私の夢の中。

なら、こういう事態も容易に想像出来ました。
であるなら……。
この様な事は、少なくとも今は決して実現しないでしょう。
でしたら、多少楽しんでも罰は当たらないですよね。
撫でるのをやめて、彼女のお餅の様な柔らかいほっぺをむにむにこねます。
しかし、考えてみれば……。
『まさか、娘の顔より先に孫の顔を拝むことになるとは、人生何があるのか分からないものですね』
今度は、眠くなったのか座った私の膝の上に頭を乗せ、眠りにつこうとしている彼女を優しく撫でながら、そんなことを思ってしまいました。
（こんな素敵な子がメジロ家に居てくれるのならこの先、メジロ家は安泰……）

『おばあ様!!』

『え!?』

不意に右側から声がしたと思えば、マックちゃんと同じぐらいの子が、私へ向かって走ってきました。
そして、私の体を抱きしめていました。
急に現れたもう一人のウマ娘の子供の出現に動揺を隠せずにいると、その黒髪の子はこちらをジッと見つめていました。
その謎のウマ娘の子供に少しだけ驚きましたが、はしたなく声を上げる程ではありません。
もう一人の来訪者に私は、必死に冷静さを掻かずにいました。
……ですがそんな努力が一瞬で無駄になってしまいました。

『『『『おばあ様!!』』』』

『……はい？』

急に左右前後から声がすると、今度はウマ娘の子供が複数人現れ、私の元に集まってきました。

『ズルい。私もやって！』

『ぎゅー！』

『私も！私も！』

『ほわぁ～』

『……』

彼女達は、集まってきた途端、子供特有の純粋に構ってほしくて、我先に自分に気を向けようと私に声を上げています。

『こ、これは一体どういう……。まさか……!?』

初めて会った私に良く懐いている彼女達を目の当たりにして、ある結論に至りました。

ですが、まさかそんなことが……。

――流石に……いくら何でも〝多すぎ〟ませんか。

恐らく正解に近い答えにたどり着き、頭の中の考えをまとめるも、急に夢から目が覚めるかの様に周りが真っ白な光に包まれて……。

気づけば、自室のベットの上で目覚めました。

「（あの夢は一体……）」

今寝ればもう一度その夢を見れるのではと思い、二度寝を考えましたが、部屋の時計はもう起きる時刻を指していたので、朝食を作るため台所へ向かいました。

不思議な夢を見てから数日後。

アサマがチームスピカの面々と顔合わせした日から1週間が過ぎ、仲間の一員として過ごしていくのに慣れつつあったある日。

そんな二人に、二人以外なら気にも留めない不可解な問題に直面する。
切っ掛けは、休日での些細な事であった……。
「最近やっと操作に慣れてきた、このスマホと言うものはとても便利ですね。知りたいと思った事を直ぐに教えてくれますから。例えば、お料理をするときのレシピ、今日あった事のニュース記事、おまけにそのニュース記事を読んだ会った事も無い人々の感想や意見までも出てきてしまうとは。ネットとは本当にすごいんですね。」
自宅のリビングにあるソファーに座りスマホを見ながら、アサマはそう言うと、隣に座るトレーナーが答える。
「そうだな。でも、あんまりネットの情報を鵜呑みにするなよ。全部が正しい情報じゃないからな。そこは、自分で信じられるかちゃんと考えて……って、さっきから何見てるんだ？」
「ふふ、気になります？いいでしょう、特別に教えてあげます！これです！」
アサマは誇らしげにスマホの画面を見せた。
「これは……マンガか？しかも、ウマッターに載ってるやつか。」
「ええ、そうです。最近空いた時間に、この方の創作物を見るのが、お気に入りなんです。」
「そうか。面白いのか？それ？」
「はい！それはとても！そうですわ！良ければ見てみますか。巷では、こうして他者にお気に入りの作品を勧めることを『布教』と言うのでしょう。ネットで見ましたわ！」
「その調子じゃどうやら、無駄な心配だったな。……ほう、これは……。」
トレーナーが嬉しそうに見せられたスマホの画面には、ウマ娘と思わしき娘と男が、手を握り合い見つめ合っている場面が写されていた。
「恋愛モノか……」
それも、恋愛ものであった。

「意外だな。そんなにハマるなんて。」
「お話が面白いのもあるんですが……上手くは言えないんですが、この作品の主人公、私他人事とは思えなかったんです。」
「まあ、そういった創作物で、リフレッシュしてくれるのはこっちとしてもありがたいから、いい事だな。」
「ええ。この作品を知ってから私、毎日この方のウマッターを見る程の大ファンになってしまったのです!!」
「そ、そうか……」
　目をキラキラと輝かせながら、アサマはトレーナーに詰め寄る。
「そう、主人公である彼女は、とある名家の生まれの学園に通うウマ娘。幼い頃から自身を利用し家に取り入ろうとする人達と多くかかわってきた為に、弱さを見せてはいけない。見せてしまえば、そこから付け入られると思い、他人に決して気を許さない冷たい氷のようなウマ娘へと成長してしまいました。ですが、学園で自身のトレーナーとなる殿方との出会いがきっかけとなり、人を信じようとしない彼女を大きく変えていくのです。特に、私のおすすめの場面は、このトレーナーである彼が捕まってしまう時に……」
「分かった。分かったから。今から見るから。近い近い。そんな詰めないでくれ。」
「え？」
　机の上に置いていた自分のスマホで調べ始めたトレーナーに対して、気の抜けた返事をするアサマが確認すると、二人の距離は二人の関係を知らない人が見れば恋人か、それ以上の近い関係だと思ってしまう程に体は密着していた。
「……あら、これは失礼しました。夢中になってしまいましたわ。今離れま……!!」
　離れようとした矢先、何か思いついたのか、アサマのウマ耳と尻尾がピンっと上に向くと、直ぐに力強く立てられたウマ耳と尻尾は、力を無くしたようにしゅんっと倒れてしまう。
　そして、こう続けた。
「彼方は、私がこう近くでいたら……イヤなの……ですか。」

目を潤ませ、まるで純真無垢な乙女の様な眼差しで、トレーナーを見つめる。
アサマは、興味があった。
笑って誤魔化すのか、あるいは力で押しのけるのか、はたまた彼が内なる本性を現しそのまま押し倒すのか。
こう言った時、この人はどんな反応をするのかと。
そんな、思いを巡らせる彼女の心境を表しているのか、尻尾か左右に振られる。
ほんの軽いイタズラぐらいに思っていた。
だが、彼女がこういった行動をして期待通りになった事などほぼ無いのである。
会話が途切れて数秒経つと、あっさり返答が帰ってきた。
「なあ、一つ聞いてもいいか……」
「は、はい!?何ですか……」
質問されるとは思っていなかったのか、揺れていた尻尾の動きが止まってしまう。
だが当然、愛の告白をするわけではなく、トレーナーは神妙な面持ちでアサマへ尋ねたのである。
トレーナーからの返事は、アサマが求める答えでは無かった。
「これ、おかしくないか？」
「……え？」
話の意図が分からず、動揺するアサマを他所にトレーナーは話を続ける。
「お、おかしい……とは、一体……」
「今、投稿されていたのを数話見てみたんだが、何も気づかなかったのか？」
「気づくとは……」
「この投稿されているマンガの出来事やイベント、全て俺達が実際に行った事のある場所や、遭遇したトラブルばっかりなんだ」
「それは……本当ですか!?」
期待していた事とは全く違ったが、話の内容が予想外過ぎて当初の

目的を忘れ聞き入ってしまう。
「ああ。よく見てみろ。投稿されてるマンガの内容だが、学園での出来事、温泉街での話、花火大会に行った時の話だって、若干の脚色が加えられてるが、ほぼそのままなんだ。それに、この話の主人公、誰かに似てると思わないか？」
　主人公であるウマ娘が、アップでスマホに写され、その画面を目を細め注意深く見ていると、アサマはある事に気付く。
「似ていると言われましても……って、ま、まさか!?」
「ああ、そうだ。似てるんだよお前にな。」
　書かれたキャラの髪型や、髪色、生い立ちなどの共通点が多々挙げられる。
　だが、それでもアサマはトレーナーが言うことを信じられずにいた。
「た、確かに、言われてみれば、この作品のお話には思い当たる出来事や、主人公のウマ娘の見た目も、私に似ていると言われれば似ているかもしれませんが……ですが、流石に偶然なのでは。」
　彼女の言うことは、もっともである。
　いくら自分たちに実際に起こった出来事や、出てきたキャラクターと似ているという理由で疑いを持つのは、こじつけではないのかと。
　だが、トレーナーには、この作品は自分たちを題材としていると言える確証があった。
「言いたいことは分かる。だが、内容も問題なんだが、一番の問題がこれを書いている人物は、現役でトレセン学園へ通うメジロ家の人間かもしれないんだ。」
「メ、メジロ家！そんな……どうしてそこでメジロ家の名前が出てくるんですか!?では、仮にあなたがおっしゃっている事が本当なら、その人物とは誰なのですか！」
『まさか、マックちゃん!?』とアサマから聞かれるも、トレーナーは首を横に振った。
　そして、トレーナーの口から、アサマの知らない名前が出てきたのである。

「……アカウント名、どぼめじろう。トレセン学園での彼女の名前は……」

「メジロ……メジロドーベルだ。」
「メジロ……ドーベル。」

トレーナーから告げられたのは、マックイーンに続き、二人目のメジロ家のウマ娘、メジロドーベルの名前であった。